

## Ⅱ 藤原京の調査

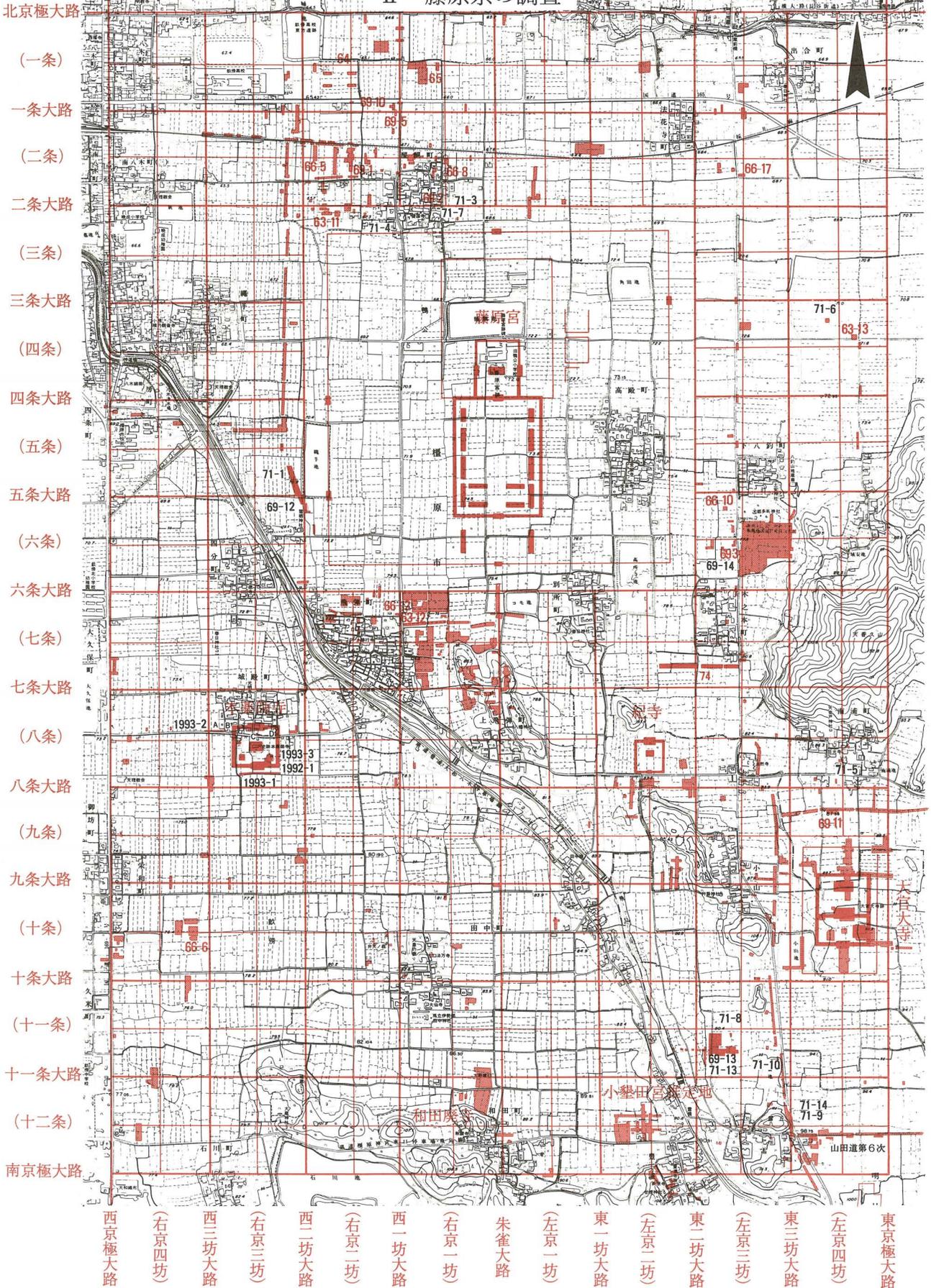


Fig.14 藤原京の調査位置図

調査次数	調査地区	面積	調査期間	調査地	所有者等	担当者	概報頁
藤原宮 69-12	6 A J L - E・F	729㎡	92.12.3 ~93.4.21	橿原市四分町・繩手町 (右京五・六条三坊)	奈良県、 道路建設	大脇 潔	75~79
69-13	6 A M H - J・Q	850㎡	92.12.8 ~93.3.15	明日香村雷字稲葉繩手・ 竹ノ花 (左京十一條三坊)	奈良県、 道路建設 (雷丘北方 第3次)	岩永省三	39~50
69-14	6 A J D - H	35㎡	93.2.25 ~3.2	橿原市木之本町89-1 (左京六条三坊)	飯田寿美、 住宅建設	大脇 潔	73
74	6 A W G - H・P	2,368㎡	93.12.1 ~94.3.24	橿原市木之本町54-2他 (左京七条一・二坊)	橿原市、 道路建設	島田敏男	未収録
71-1	6 A J L - B・C・D	895㎡	93.5.6 ~7.23	橿原市四分町・繩手町 (右京五條三坊)	奈良県、 道路建設	深澤芳樹	80~82
71-3	6 A J E - H	27㎡	93.4.26 ~4.28	橿原市醍醐町238-2 (右京二条一坊)	森田昭弘、 駐車場建設	黒崎 直	74
71-5	6 B N G - H	22㎡	93.6.22 ~6.24	橿原市南浦町 38・40・41・100 (左京八条四坊)	森本伊左夫 倉庫新築	伊藤 武	73
71-6	6 A J B - A	100㎡	93.8.2 ~8.9	橿原市膳夫町196-1 (左京四條四坊)	岩本久一、 住宅建設	岩永省三	73
71-8	6 A M H - J	15㎡	93.10.21 ~10.22	明日香村雷235-1 (左京十一條三坊)	小山良太郎 住宅建設 (雷丘北方)	岩永省三	39~50
71-9	6 A M H - E・F・N	370㎡	93.11.12 ~94.1.17	明日香村雷字東浦 (左京十二條三坊)	奈良県、 道路拡幅 (雷丘東方)	大脇 潔	51~65
71-10	6 A M H - C・D・E・ J・K	465㎡	93.11.30 ~12.27	明日香村雷字ハリマダ・ 東浦・狐塚 (左京十一・十二條三坊)	奈良県、 道路拡幅 (雷丘東方)	西口壽生	66~72
71-13	6 A M H - J	434㎡	94.1.10 ~4.7	明日香村雷字稲葉繩手 (左京十一條三坊)	奈良県、 道路建設 (雷丘北方 第4次)	西口壽生	未収録
71-14	6 A M H - E・F	180㎡	94.1.24 ~2.28	明日香村雷字山ノ北・東 浦 (左京十二條三坊)	奈良県、 道路建設 (雷丘東方)	西口壽生	51~65
本薬師寺 1992-1次	6 B M Y - D	450㎡	93.2.15 ~4.15	橿原市城殿町282・283 (右京八条三坊)	西田佐芋、 計画調査	本中 真	83~97
本薬師寺 1993-1次	6 B M Y - D	200㎡	93.4.19 ~4.21	橿原市城殿町 (右京八条三坊)	城殿町共有 地、水路改 修	黒崎 直	83~97
本薬師寺 1993-2次	6 B M Y - C・J 6 A W J - M	82㎡	93.9.2 ~9.11	橿原市城殿町 (右京八条三坊)	橿原市、 下水道埋設、 立会	本中 花谷 浩	98
本薬師寺 1993-3次	5 B M Y - D	307㎡	94.2.10 ~4.15	橿原市城殿町282・283 (右京八条三坊)	西田佐芋、 計画調査	花谷 浩	未収録

Tab. 5 藤原京の調査一覧

## 1 左京十一條三坊（雷丘北方遺跡）の調査（第69-13・第71-8次）

（1992年12月～1993年3月、10月）

雷丘北方遺跡は雷丘の北北西200m、ギオン山の南西80mほどの位置にあたり、北から小山、ギオン山、ギオン山、雷丘と続く低い丘陵の西に広がる緩やかな斜面上の水田で、西方約100mを飛鳥川が北流する。藤原京の条坊では左京十一條三坊西南坪の中心部にあたる。1990年以前には、当遺跡周辺では発掘調査が行われておらず、1975年頃に田に暗渠を敷設した際に柱根2本と土器若干が出土したり、北方の字カナヤケで重弧文軒平瓦を採集し雷廃寺（仮称）跡かと推定する程度の知見しかなかった。しかし、1991年4～8月に今調査地の北側で県道樞原神宮東口停車場飛鳥線の新設によって移転する民家住宅の新築に伴う事前調査として第1次調査、1991年12月～1992年4月に第1次調査地の南側の県道予定地で第2次調査をおこない重要な知見が明らかとなった。すなわち①藤原京左京十一條三坊のほぼ中軸線上に大規模な四面庇付東西棟建物がある。②その西方に長大な南北棟建物が2棟南北に並ぶ。③建物群の西と南に掘立柱塀とその外側の溝とが組み合った区画施設が存在する。④以上の遺構は7世紀後半に造営され藤原宮期を経て、奈良時代に廃絶した。以上の事実から、次のように想定できた。①東西棟建物を正殿、南北棟建物を脇殿と捉えると、正殿を中心とし東側にも同規模の南北棟建物が存在する。②正殿中軸線上南方に門が存在する。③この遺跡の性格については、建物の規模・形態・出土遺物などから宮か官衙が候補となる。

今回の第69-13次調査は県道予定地の調査の一環、第71-8次調査は第1次調査地東北隅における擁壁工事に伴う事前調査である。第69-13次調査では、過去の調査から得た想定を検証するとともに、遺跡の性格を解明する手がかりを得ることを目的とし、東南脇殿想定位置（A区）と門想定位置（B区）に調査区を設けた。なお、第2次調査区と飛鳥川との間にも小調査区（C～F区）を設けたが、飛鳥川の氾濫で遺構は削平されていた。調査面積は約850㎡。第71-8次調査は東南脇殿と東北脇殿の一部の検出を目的とし、調査面積は約15㎡。

## 1 遺 構

調査地全体の地形は南東が高く西北へ低くなり、古代の遺構はこの緩斜面に大規模な整地を行なってから造られる。整地には様々な土を用いているため、遺構の検出はかなり難しい。検出した遺構は、第1・2次調査の結果から存在を想定した東南・東北脇殿や区画施設などであり、A1～3・Bの大別2時期、細別4時期に分けられる (Fig.15)。

### A 1 期

掘立柱建物3棟、掘立柱塀2条、溝2条がある。

S B 2830は、S B 2661を正殿、S B 2670を西南脇殿とした場合の東南脇殿に当たる (P L.7)。A・B両期を通じて存続する。掘立柱の南北棟建物で6間分を検出した。S B 2670と同規模であれば身舎が17×2間となる。S B 2670と同様に東西2面に庇が付く。身舎の南から3・4間目の間と5・6間目の間に間仕切りがある。柱間寸法は身舎が2.4m (8尺) 等間、庇の出が2.1m (7尺)。身舎の柱穴は東西に長い長方形で、長辺1～1.6m、短辺0.6～1.2mである。柱は掘形の中央ではなく建物の内側に寄せた位置に立てられている。検出した柱穴13ヶ所のうち5ヶ所に柱根が残り、他は抜き取られていた。柱の直径は約25cmである。庇の柱穴は一辺0.4～0.7mと小さく、柱穴17ヶ所のうち5ヶ所に柱根が残り、他は抜き取られていた。柱の直径は約15cmと細い。建物の身舎部分に玉石敷が施されている。石敷面は建物中心部が高く、周囲がやや低くなる。壁のない吹抜けの建物であろうか。

S B 2830の周囲にはそれに付属する施設がいくつかある。S X 2833・2837は、S B 2830の側柱列からそれぞれ0.25mと0.65m外側にある小石列で、現状ではそれぞれ1.1mと0.75mしか残存しないが、本来は建物の周囲を取り巻いていた可能性がある。石列の内外で遺構面の高低差はない。S D 2836はS B 2830の西庇の西0.9mにある南北溝で、S D 2730Aに流れ込む。現状では2mしか残存しないが、S B 2830の西雨落溝であろう。

S B 3000は西北脇殿S B 2672に対応する東北脇殿であり、西庇の柱穴3ヶ所を検出した。柱間寸法は2.65m (9尺) 等間である。柱穴は一辺0.4mで、柱痕

跡の直径は約10～15cmである。南の柱穴が妻にあたと推定され、S B 2830が桁行17間・8尺等間とした場合の北妻想定位置とは3.5m離れる。西北脇殿S B 2672は西南脇殿S B 2670とは4.1m離れ8尺等間であるから、西北・東北の両脇殿は左右対称ではない。

S B 2850は南に庇が付く掘立柱東西棟建物であろう（P L. 8）。S B 2830と4.1m（14尺）離れ、南側柱列がS B 2830の南妻と筋を揃える。A 1～3期に存続し、B期には撤去され礫敷S X 2685で覆われる。A区西端で東妻、B区で南庇を検出した。第2次調査区で検出した3本の柱S X 2732はS B 2850の北側柱の一部に当たると思われるが、第2次調査区ではB期の礫敷S X 2685をごく一部しか除去しなかったため、他の柱穴は検出していない。桁行は17間と推定され、梁間2間で柱間は2.4m（8尺）等間、庇の出も2.4m（8尺）である。柱穴は長方形で、長辺1.2～1.7m、短辺0.9～1.2mである。検出した柱穴18ヶ所のうち8ヶ所に柱根が残り、他は抜き取られていた。今調査区では柱穴を断ち割らなかったが、第2次調査区のS X 2732の柱の直径は約25cmである。

S A 2845はS B 2830の東6.5mにある掘立柱の南北塀で、S B 2670の西側のS A 2745と対応し、この遺跡の中心部分の東限を区画する施設である。南端でS A 2735と接続し、L字形に区画施設の東南隅部を形成する。A・B両期に存続する。9間分を検出した。柱間寸法は、北から5間目までが2.4m（8尺）等間でS B 2830と柱筋が一致するが、6間目以南はA 1・2とA 3期以降の間で変化する。A 1・2期にはS A 2845の南端から2間が1.7m（6尺）等間で、その北側が4.3m開いてS D 2730 A・Bが通る。柱掘形は北から7ヶ所が一辺0.5～0.7mの長方形、南から3ヶ所は径0.3mの円形で、3ヶ所に径約15cmの柱根が残り、他は抜き取られている。なお、S A 2845とS B 2830との距離（6.3m）は、S A 2745とS B 2670との距離（5.2m）より大きい。つまり、S B 2830とS B 2670との間にこの区画の中軸線を考えると、S A 2845の方がS A 2745より外側に寄っている。

S A 2735はS B 2830の南5.6mにある掘立柱の東西塀で、この遺跡の中心部の南限を区画する施設である。A・B両期に存続する。長さは約78m（265尺）

あり、S B 2830・2670の中央を区画の中軸線とすると、東半は39.7m（135尺）あり柱間寸法2.35m等間の17間、西半は38.3m（130尺）あり柱間寸法2.4m等間の16間に復原できる。西半の方が柱間がやや広い。A区で1間分、B区で5間分を検出した。柱掘形はB区以西では一辺0.8～1.2mの方形であり、A区では径0.3mの円形である。B区の西から5本目以西は北側から柱が抜き取られ、それ以东では真上に抜き取られている。なお、B区の中央が区画の中軸線に当たることから門の存在が推定されたが、柱列が複数並ぶ建物は存在しない。扉に扉を設けた簡単な出入り口があった可能性はある。

S D 2730はS B 2830・2850とS A 2735の間を流れる東西溝である。堆積土の状況などからA～Dに細分でき、AがA 1期、BがA 2期、CがA 3期、DがB期に属す。A 1期のS D 2730 Aは、S A 2845の東側から区画内に流れ込み、S B 2830の西側柱筋以东では幅3～3.5mであるが、それ以西は急に狭まり、S B 2850の東妻以西では幅1.4mとなり、S B 2850の南庇に接して流れる。深さは区画中軸線以东では0.7mであるが、それ以西は急激に浅くなり第2次調査区では0.15mである。

S D 2740はS A 2735の南にある大規模な東西溝である。堆積土の状況などからA～Cに細分でき、AがA 1・2期、BがA 3期、CがB期に属す。S D 2740 AはB区で北半を検出した。第2次調査区ではS A 2735の2.9m南に平行して溝の北岸があるが、東に行くほど南に偏し、B区東端でS A 2735の南約3.4m、A区には及んでいない。S D 2740 Aの北岸には直径約10cmの丸太を約1 m間隔で打ち込んだしがらみの護岸がある。S D 2740 Aの深さは約0.9mで下から順に灰白色粘土・暗灰色粘土が堆積し、幅は第2次調査区検出部分と同じとすれば約5.7mである。なお、区画中軸線付近に橋が掛けられていた痕跡はない。

B区東端にS D 2740 Aに流れ込む南北溝S D 2872・2873がある。S D 2872は幅0.4m、深さ0.45m、S D 2873は幅0.4m、深さ0.45mで、A 1ないしA 2期に属すが、同時並存であるか時間差があるかは不明である。

## A 2期

S D 2730が改修され、S A 2845とS B 2830の間に小規模な区画施設S A 2857・

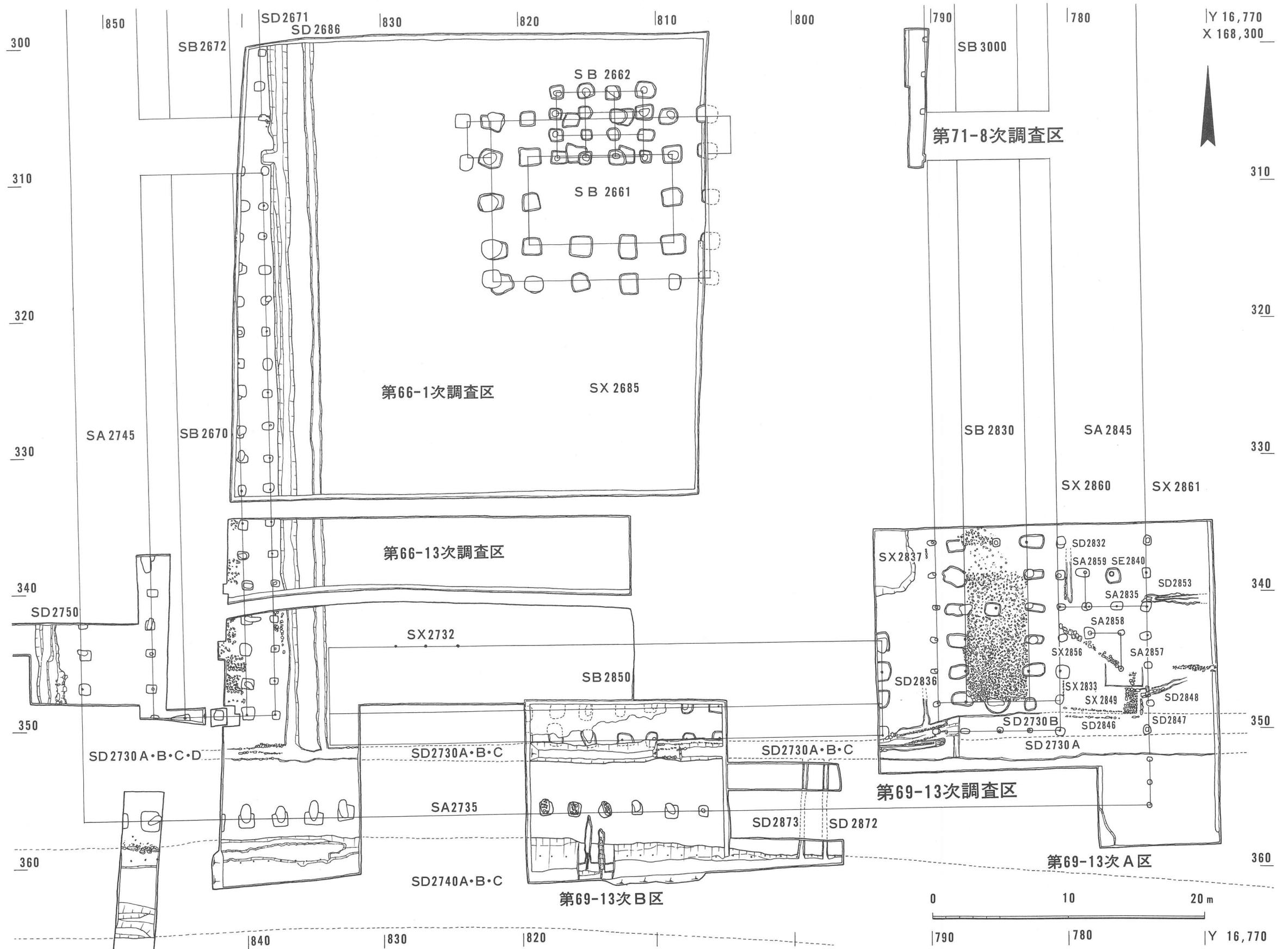


Fig.15 第69-13・第71-8次調査遺構図 (1:300)

2858・2859が造られる。

S D 2730 B は、S B 2850の東妻以東でS D 2730 A の南半を埋め立て溝幅を狭め、S B 2850東妻柱筋からS B 2830西側柱筋の西1.5mの間について、兩岸を石組で護岸したものである。石組は、一辺10～35cmの玉石を、長辺を流路の方向と平行に4段、高さ40cm、長さ5.5mに積み上げたもので、北岸東端はL字形に納め、南岸の東から1mの所にクランク状の屈曲部を設けている。溝幅は石組以東で1.7m、石組部で0.5～0.7m、石組以西で0.8～1.3mである。深さはA区東端で0.65m、西に行くほど浅くなり区画中軸線付近で0.4m、第2次調査区で0.15mである。

S A 2857・2858・2859は皆、S B 2830とS A 2845の間にある柱間1間の掘立柱塀であり、柱間は順に2.6m、2.25m、2.6mである。S A 2857・2858は組み合せてL字形となる。

### A 3 期

S B 2830・S A 2845・S D 2730・S D 2740が改修され、S B 2830の東側にS A 2835・S D 2832・S D 2853・S E 2840・S X 2855・S X 2856が造られる。

S D 2730 C は、S B 2850東妻柱筋以東のS D 2730 B を埋め立て、S B 2830に南庇を付けたのに伴い、溝を南庇の南側に移し雨落溝兼用としたものである。現状ではS B 2830の西庇筋のすぐ東で溝は止まっているが、本来はS B 2830の東庇筋までは伸びていた可能性がある。B区東半部では兩岸に川原石を並べ、簡単な護岸とする。溝幅は0.9～1m、深さはA区西端で0.5m、B区中央で0.2m、第2次調査区で0.15mである。

S B 2830にあらたに付加された南庇は、出が2.1m（7尺）である。

S A 2845には、A 1・2期にはS D 2730 A ・Bを通す開口部が設けられていたが、S D 2730 B が埋められたのに伴い、開口部の中央に柱が立てられ閉塞される。

S D 2740 B はS D 2740 A の北岸を約1m拡幅したものである。第2次調査区西端では北岸が大石で護岸されていたが、第2次調査区東半および当調査区では大石護岸は存在しない。溝幅は約6.5m、深さ約0.5～0.8mであり、下から順

に青灰色砂・淡灰緑色砂・灰褐色砂が堆積し、7世紀後半の土器が少量出土したが、木簡は出土しなかった。

S A 2835はS B 2830とS A 2845をつなぐ掘立柱の東西塀で、S B 2830の南から5本目の側柱とS A 2845の南から8本目の柱に取り付く。この位置はS B 2830の間仕切りと対応する。塀は3間あり、柱間寸法は2.2m（7.5尺）等間である。

S D 2832はS X 2834のすぐ東に接する南北溝で、幅0.4m、深さ7cmである。S A 2835の北0.5mで止まり、それ以南には伸びない。西岸にある石列S X 2834はこの溝に伴う護岸であろう。

S D 2853はS A 2835東端柱穴のすぐ北から東へ伸びる東西溝で、幅0.6m、深さ6cmの掘形の底に平瓦を並べる。

S E 2840は、S A 2845・S A 2835・S D 2832に囲まれた空間内にある井戸で、一辺1.1m、深さ1.15mの隅丸方形の掘形の北西寄りに、重弧紋軒平瓦3点を瓦当面を上にして円筒状に組み合わせたものを2段重ねて井戸枠とする。隣合う軒平瓦の合わせ目の凸面側の隙間には、木製の棒を詰めて塞ぐ。井戸枠は内径28cm、高さ90cmであり、廃絶時に枠内に多量の玉石と瓦・土器が廃棄された。

S X 2855・2856は拳大から人頭大の石を並べた石列である。いかなる性格の施設か不明確であるが、庭園の一部である可能性がある。S X 2855はS A 2845の西1.2mにあり、B期のS X 2849と重複するため一部のみ検出した。幅0.5m、長さは1m以上である。S X 2856は、S B 2830の東庇の南から4間目からS X 2855の北端へ向かって伸びる。幅0.4m、現存長5.3mで、S B 2830に近い所では、一抱えほどの石8点と重弧紋軒平瓦1点を組んでいる。

## B期

S B 2850が撤去され、S D 2730Cが埋められ、S B 2830・S A 2735・S D 2686に囲まれた空間に礫敷S X 2685が施される。S D 2740は北岸が南へ移動しS D 2740Cとなり、S A 2735の北側からS D 2740Cへ排水するための暗渠S D 2880・開渠S D 2881が造られる。S B 2830とS A 2845の間にS D 2846・S D 2847・礫瓦敷施設S X 2849が造られ、それ以北の全面に礫敷S X 2860が施される。S A

2845の東側にも S D 2848が造られ、それ以北に礫敷 S X 2861が施される。

礫敷 S X 2685は拳大の礫を粗く敷いたもので、表面は凹凸が著しい。当期に S D 2686以東の S D 2730 C は埋め立てられ S X 2685で覆われ、 S D 2686以西に残存するのが S D 2730 D である。

S D 2740 C は北岸が S A 2735の南約4.3m にあり、北岸のみ検出したため、幅・深さ共に不明である。黒褐色砂質土が堆積し、7世紀後半の土器が出土した。

S D 2880・2881は共に S D 2740 C に流れ込むが、同時並存ではないと考えられる。S D 2880は、幅0.4～0.5m、深さ0.35mの掘形の中に、長さ1.15m、幅0.35mで上面を浅い凹字形に加工した木材1点と、行基式丸瓦5点を凹面を上向き、広端面を北向きに並べ、その上に重弧文軒平瓦1点と平瓦5点を凸面を上向き、広端面を北向きに置いて蓋をし埋め戻したものである。S D 2881は幅約0.5m、深さ0.2mの掘形の底に、長さ1.35m、幅0.3mの上面が平らな木材を置いたものである。

礫瓦敷施設 S X 2849は、S A 2845の南から5本目の柱のすぐ西側にある、南北1.8m、東西1.2mの範囲に礫と瓦を敷いた遺構で、縁石には径20～35cmほどの大きめの石、内部には拳大の石を用いる。S D 2846は両岸に玉石を並べた溝で、S B 2830の南庇の東外から発し、東端では北縁石を S X 2849の南縁石と共用し、S D 2847につながる。幅0.5m、深さ5cm。S D 2847は S X 2849の東に沿った南北溝で、両岸に川原石を並べ底に玉石を敷き、西縁石は S X 2849の東縁石と共用する。幅0.45m、深さ10cm。S D 2848は S D 2847の北端から東北東へ向かう溝で、S A 2845の南から5間目を抜けてさらに東に流れる。S A 2845の西側では S D 2847同様に両岸に川原石を並べ底に玉石を敷くが、S A 2845の東側では素掘りとなる。底に薄く砂が堆積した時点で、その上に玉縁式丸瓦6点を凹面を上向き玉縁を東向きに並べて改修する。幅0.4m、深さ10cm。

礫敷 S X 2860は、S B 2830と S A 2845の間で S D 2846・S X 2849・S D 2848以北の範囲に、拳大から人頭大の礫を粗く敷いたもので、後世の攪乱が著しい。礫敷 S X 2861は、S A 2845の東で S D 2848以北の範囲に、拳大から人頭大の礫を粗く敷いたもので、後世の攪乱が著しい。

## 2 遺物

瓦類・土器類などがある。その多くは礫敷上面から出土した。

**瓦** 瓦類の大部分は礫敷 S X 2860・2861の上面と S D 2730 C・S E 2840・S D 2853・S D 2880・S X 2849・S D 2848から出土した。今回は S B 2830の東側に多く、第2次調査区では S B 2670の周囲に多かったが、S B 2830・2670が本瓦葺であったかどうかは慎重な検討を要する。当遺跡に於ける瓦類の出土量は、藤原京域の通常の遺跡よりは多いが、寺院跡のように本瓦葺建物があつた遺跡ほど多くはなく、遺構に伴う瓦はすべて A 3期以降に属し、転用品であつた。棟など屋根の一部のみに瓦を葺いた可能性、あるいは、当地付近に本瓦葺建物を有した寺院などの施設があり、そこから不要品が当地に持ち込まれ再利用された可能性を考えたい。軒丸瓦には大官大寺式6点、鬼面文1点があり、軒平瓦には四重弧文25点、重弧文6点、大官大寺式10点などがある。平瓦には凸面布目のものが多い。

**土器** 土器類は S D 2740 A・B、S D 2730 A・B・Cから少量出土し、礫敷上面から比較的多く出土した。A期の遺構に伴うものは、7世紀後半（飛鳥Ⅳ）が多い。S D 2730 B出土品には、漆運搬用の須恵器壺、漆のパレットに用いた土師器坏、表面に漆を塗った須恵器鉢などがあり、ほかに硯2点、7世紀代の土馬1点がある。B期の礫敷 S X 2685上面では、藤原宮期～奈良時代の土器がみられる。

## 3 まとめ

**遺構配置** 1～3次の調査結果を総合すると遺構配置は以下のようになる。

① この遺跡の中心部には、四面庇付きの東西棟建物 S B 2661を中心に、その東・西・南側に長大な建物（S B 2830・3000・2670・2672・2850）が建つ。東西の脇殿は2棟の南北棟が南北に並ぶ。S B 2670は桁行が17間であり、S B 2830・2850の2棟も17間と推定される。

② 建物群の東・西・南側に掘立柱塀の区画施設（S A 2845・2745・2735）が存在し、西面と南面には塀の外側に溝（S D 2740・2750）がある。南面の区画中心軸線上には柱列が複数並ぶ建物としての門は存在せず、塀の外側の大溝 S D

2740に橋も掛かっていない。したがって、この区画の主要な入口は南面ではなかった可能性が大きい。

③ 遺構の配置にはその位置・距離などにある程度の計画性が窺える。たとえば、正殿S B 2661の棟通りとS B 2850の棟通りとの距離は35.2mで120尺とみなせ、S B 2850棟通りとS A 2735との距離は10mで35尺に近い。東西両脇殿の棟通り間の距離は57.2mで195尺に近い。現状では、東脇殿S B 2830とS A 2845との間隔(6.4m)の方が、西脇殿S B 2670とS A 2745との間隔(5.1m)より広い。そのため、S A 2745とS A 2845の中間点が、S B 2670とS B 2830の中間点より0.65m東に寄っている。しかし本来、S A 2745からS A 2845までの距離(78m)が265尺で計画され、S A 2745・S A 2845の中間点とS B 2670・S B 2830の中間点とを一致させる計画であったと仮定すると、脇殿棟通りから南北塀までが35尺となり、S A 2745・2845・2735は、それぞれS B 2670・2830・2850の棟通りから35尺の距離に設定されたことになる。この他に計画性を窺わせる点としては、東西両面の南北塀が脇殿と柱筋を一致させている点、S B 2830とS B 2850、S B 2850とS B 2670、S B 2670とS B 2672の間隔がともに4.1m(14尺)である点がある。S A 2745のすぐ西側に溝S D 2750があるのに対し、S A 2845のすぐ東側には溝が検出できなかったが、当調査区の東外にある可能性を考えたい。

**遺構の時期** 遺構に伴った遺物の年代からみて、A期は7世紀後半(飛鳥Ⅳ)に遡る。S D 2730からは藤原宮期(飛鳥Ⅴ)の土器は出土せず、S D 2730を埋めて礫敷S X 2685を施したB期の初頭が藤原宮期、B期の下限は奈良時代に及ぶと考えられる。

**占地・条坊との関係** 正殿S B 2661の中心は十一條三坊西南坪の中軸線にほぼ一致し、南脇殿の南妻の位置もほぼ坪の南北二分線に合う。北脇殿の規模は不明であるが、南脇殿の半分と見積っても西北坪へ及ぶことは確実に、少なくとも南北2坪を占地していたことが明らかである。こうした状況から、第1・2次調査の概報では、この遺跡を藤原京の条坊に則したものと推定した。注意すべきは、A1期が7世紀後半にまで遡るから、ここで言う条坊は藤原宮期の条坊ではなく、いわゆる先行条坊と考えられる点である。先行条坊は藤原宮や京内

寺院と重複する部分以外では、藤原宮期の条坊と区別しにくく検出が困難で、それがいかなる範囲に施工されたかは、今後解明すべき課題であるが、当地での所見は、当地周辺での先行条坊施工の間接的証拠とできようか。また藤原宮期についても、左京域では十条以南の条坊遺構の検出例に乏しい点がかねて問題とされてきたが、当地周辺での調査の進展で良好な条坊遺構が見いだされる期待が高まったといえよう。

**建物の規模** S B 2661は四面庇付きで、柱間寸法が大きく、柱掘形もきわめて大型である。飛鳥・藤原地域で今までに判明している邸宅跡の正殿と比較すると、平面規模ではS B 2661を凌ぐものがあるが、柱間寸法と柱掘形の規模の大きさは際だっている。また、脇殿も東西二面に庇が付き、S B 2670・2830・2850の桁行17間に匹敵する長大な建物は京内では知られていない。

**遺跡の性格** 3回の調査によって、この遺跡が大規模な整地を行った後に形成されていること、占地・規模・建物配置・時期などについてその一端を明らかにすることができた。しかしながら、この遺跡の性格に関してはなお不明な点が多い。寺院、貴族の邸宅、官衙、宮などが候補として挙げられるが、建物の規模、形態、出土遺物などから前2者には無理がある。正殿と脇殿からなるコの字形の建物群は政治的な場としての機能が考えられるので、官衙の可能性もある。しかし、先に推定した建物配置について、北脇殿を南脇殿と同様の長大な規模とし、さらに正殿の北に東西棟の後殿の存在を想定すると、飛鳥稲淵宮殿の建物配置と極めて類似した形態となる。また、正殿の周囲を長大な建物で囲む形に復原すれば、石神遺跡A期（斉明朝）の東区画に似た配置となる。雷丘北方遺跡の場合、少なくとも2坪を占地しており、建物群の南方・北方にかなりの空間があるため、ここに生活の場を想定すると、政治的な行事や儀式を行う場と私的生活の場とを組み合わせた宮としての性格付けも不可能ではない。今回の調査範囲は中心区画部分に限られたため、遺跡の性格を明らかにする手がかりが十分得られなかった。今後の継続的な調査が必要である。

## 2 左京十一・十二条三坊（雷丘東方遺跡）の調査

### A 第71-9・14次調査

(1993年11月～1994年2月)

県道榎原神宮東口停車場飛鳥線の拡幅工事に先立ち、明日香村雷において、第71-9・14次の計2次にわたって実施したものである。地元で「上の山」と「城山」と呼ばれるふたつの丘は、『日本書紀』や『万葉集』、『日本霊異記』の冒頭の説話に登場する「雷丘（岳・岡）」の有力な候補地である。今回の調査地は、北にある「城山」の東斜面にあたり、藤原京左京十二条三坊に位置する。

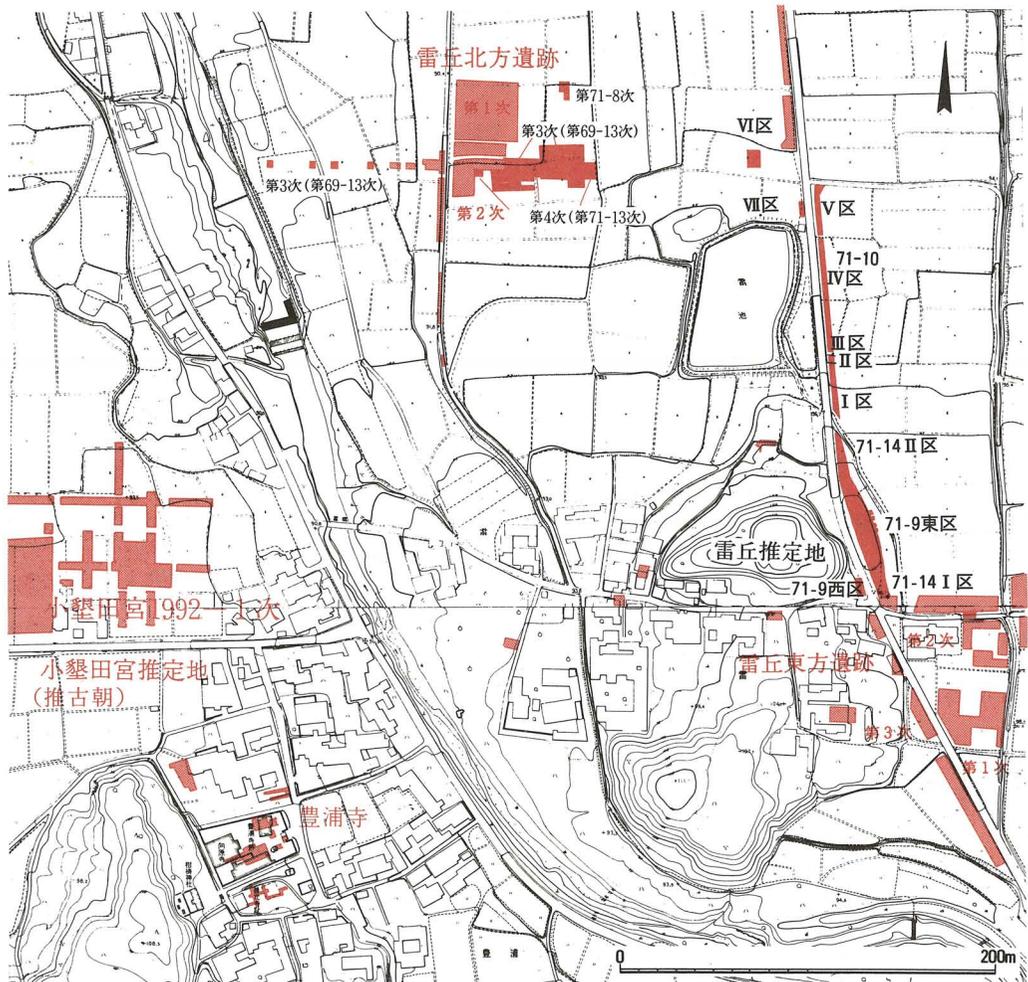


Fig.16 第71-9・10・14次調査位置図

周辺では、1970年の第1次調査（『報告』Ⅲ）を皮切りに、民家の新築や道路の拡幅に伴う調査を明日香村教育委員会と協力して実施しており、「雷丘」の東方に7世紀から9世紀代にかけての掘立柱建物や塀、井戸や池状遺構などが存在することが明らかになっている。また、1988年からは、県道樫原神宮東口停車場飛鳥線の拡幅工事に先立ち、推定山田道の調査を東から6次にわたって継続してきており、弥生時代から奈良時代にかけてのこの一帯の利用状況が明らかになりつつある。

しかし、以上の調査もその発掘面積が狭小な範囲に限定されたこともあり、各時期の遺構の性格については不明な点も多く、「雷丘東方遺跡」と仮称して調査を進めてきたところである。このうち、第1次調査の成果をとりまとめた『報告』Ⅲでは、8世紀後半から9世紀前半にかけて営まれた宮殿・官衙ないしは貴族の邸宅と推定される遺構群を、『続日本紀』にみえる奈良時代の小治田宮に比定しうる可能性を指摘するとともに、今後の調査の進展にまつられる点が多いことを併記した。この推定は、1987年に第1次調査区のわずか10mほど西で、明日香村教育委員会が実施した調査によって検出された井戸から「小治田宮」と書いた多数の墨書土器が出土したことによってその可能性がより高まり、雷丘東方遺跡周辺の調査の重要性が再認識されたのである。

今回実施した調査は、まず遺構の有無を確認するために現道路の東側に東西6m、南北20mの発掘区を南北に2箇所設け、第71-9次調査として開始した。その結果、予想外に多数の遺構が良好な状態で遺存することが判明したので、両区をつないで南北53m、東西5~9mの東区とし、さらに最終的には礎石建物S B 3040の東西の規模を確認するために東側の畦際を4箇所拡張した。また、道路西側の遺構の有無を探るために、3m四方の西区を設けた。第71-9次調査の総面積は380㎡である。

この調査に続いて実施した第71-14次調査は、前回調査の際に土盛りとした北側や、休憩用テントを設けた南側にも遺構が広がっていることを確認したので、前回の調査地を埋め戻した後、北と南に発掘区を設けて実施したものである。南をⅠ区、北をⅡ区として調査を進めたが、新たに第71-9次西区に北接

して信号機の設置が計画され、これをⅢ区として併せて実施することとした。調査区の設定にあたってはⅠ区では北を第71-9次調査東区の南端と、南を山田道第5次調査区西端と重複させ、Ⅱ区では第71-9次調査東区の北端と重複させて、それぞれの調査との連続性をもたせるとともに拡幅される道路の路線敷内全域を調査するように配慮した。第71-14次調査区の面積は180㎡である。

## 層 序

各区における層序は、「城山」の丘陵が東へ舌状に張り出した部分と、それ以外ではかなり異なる。

第71-9次調査東区の西南部では遺構面が浅く、畑の耕土と床土の直下が風化した花崗岩の岩盤となり、この上面で遺構を検出した。しかし、その範囲から南・東・北へは岩盤が急に深く落ち込んで遺構検出面も深くなり、床土の下に灰褐色土があり、さらに黄褐色粘質土・茶黄褐色粘質土が丘陵の裾にいくに従い厚く堆積する。この範囲の遺構の大半は、丘陵を削平し整地した花崗岩風化土を多く含む黄褐色粘質土上面で検出したが、北東部では7世紀前半代の遺物を含む茶黄褐色粘質土の上面で検出したものもある。

Ⅰ・Ⅱ区の基本的な層序と遺構検出面は第71-9次調査区と変わらないが、Ⅰ区の南半とⅡ区の北半は、かつての水田面が一段低く、奈良時代の遺構面は削平されていた。さらに、Ⅱ区の北半は、近年に地山の黄褐色粘土面まで掘り下げて廃材で埋められており、古代に遡る遺構は全く残されていなかった。

## 時期区分

今回検出した遺構の大半は、「城山」の東斜面の削平と整地を伴う大規模な造成工事の後に建設されたものと推定される。それぞれの重複関係や位置関係、建物の方位などを考慮すると、少なくとも4時期以上にわたり断続的に営まれたことが判明した。しかし、出土遺物の整理が終わっていないこともあり、現時点で各時期に細かな年代を与えることは困難である。そこで、雷丘東方遺跡の第1次調査成果の報告の際に提示した4期にわたる時期区分を参考に、まず大まかな年代観を示しておきたい。

Ⅰ期の遺構群は、『報告』Ⅲでは、建物や塀の方位が国土座標軸にほぼ一致

するものとし、その年代を7世紀後半の飛鳥浄御原宮の時期と推定した。

Ⅱ期の遺構群は、建物の方位が北で西に4度前後振れ、柱間寸法が10尺等間のものとし、天平末年から天平宝字末年の年代を与えた。

Ⅲ-1期の遺構群は、建物の方位はⅡ期と同じであるが、Ⅱ期の遺構の一部を改築したものとし、天平宝字末年から平安時代初期の時期とした。

Ⅲ-2期の遺構群は、Ⅲ-1期の遺構と一時併存した可能性が強く、方位や柱間寸法も同じだが、平安初頭を上限とし9世紀中頃まで存続したものである。

以上の時期区分のうち、雷丘東方遺跡第1次調査区で検出した7世紀代の遺構は少なく、その性格も不明であった。しかし、その後の調査の進展、および今回の調査成果によって7世紀前半に遡る遺構と、7世紀後半の大規模な建物群が雷丘周辺に存在することが確認され、今後はこれらの性格についても慎重に検討する必要があるだろう。しかし、8世紀後半以降のⅡ～Ⅳ期の遺構については、その後発見された「小治田宮」などの墨書がある土器群の9世紀前半という年代観を補強材料とし、その年代幅はかなり限定できる。したがって、雷丘東方遺跡に営まれた遺構は、7世紀前半代のもの、7世紀後半代のもの、8世紀後半から9世紀中ごろにかけての「小治田宮」関連の遺構の3時期に大きく分けて考えることができそうである。

## 遺 構

2次にわたる調査で検出した遺構には、礎石建物2棟、掘立柱建物6棟、掘立柱塀5条、井戸2基などがあり、ほかにまとめきれない多数の柱穴や小穴、大小の溝や土坑がある。調査区が細長い範囲に限定されたため規模や年代が確定できない遺構が多いが、とりあえず、東区とⅠ・Ⅱ・Ⅲ区（西区を含む）にわけ、各区別に概要を報告する。なお、調査区は藤原京の復元条坊呼称に従えば、左京十二条三坊の東北坪と東南坪にまたがり、十二条々間路の存在が推定される位置にあたるが、関連する遺構は検出できなかった。

**東区** 南半を中心に、掘立柱建物3棟、掘立柱塀4条、礎石建物2棟、井戸1基、土坑5基などの多数の遺構が重複して存在する。

掘立柱建物S B 3010は、東区南東部にある桁行5間、梁間2間に復元できる

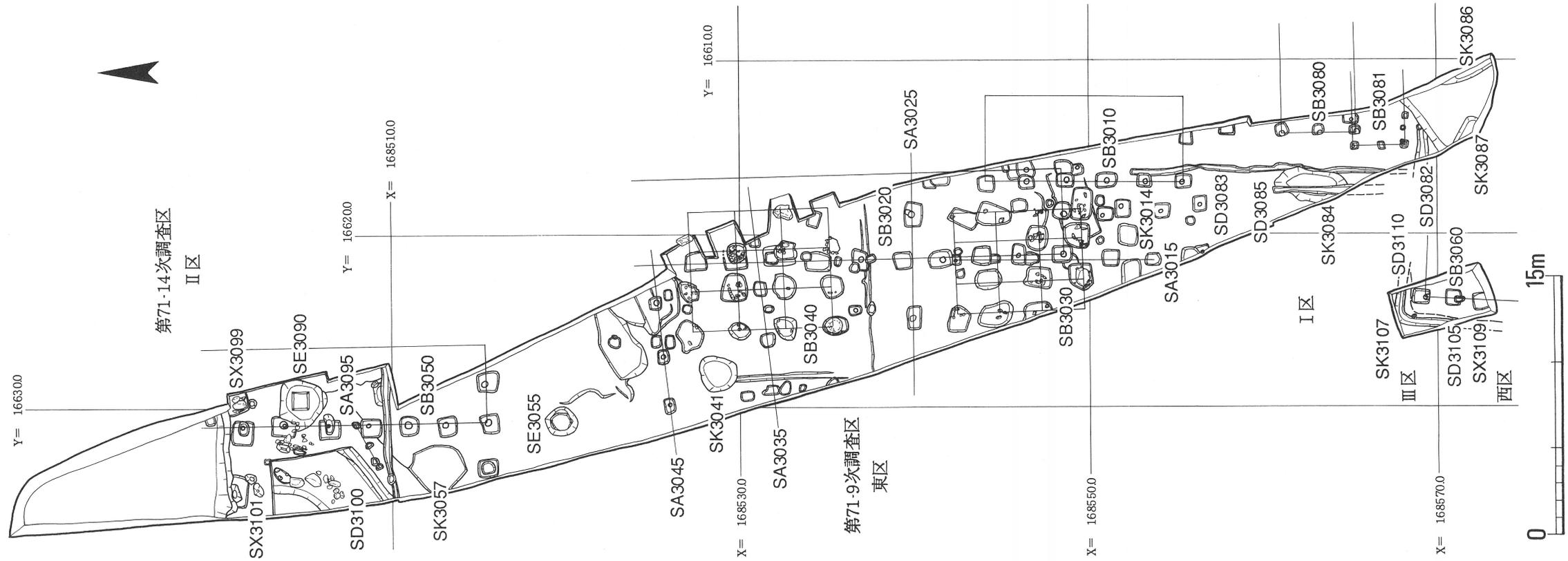


Fig.17 第71-9・14次調査遺構図 (1 : 300)

南北棟建物。柱間寸法は桁行2.3m前後（総長11.5m）、梁間2.5mである。柱掘形は一辺0.8～1mほどの大きさがあり、径0.2mほどの柱痕跡が残る。建物の方位は北で東にわずかに振れる。柱穴の一部から奈良時代から平安時代の土器が出土した。

掘立柱塀 S A 3015は、東区の南半にある南北塀で、5間分（全長11.25m）を検出した。柱掘形に大小があり、柱間寸法にもばらつきがあるが、2.25m前後である。基準とする方位は国土座標軸にほぼ一致する。出土遺物からは年代を特定できないが、柱穴の重複関係から7世紀後半代の建物 S B 3020より古いことは確実である。

掘立柱建物 S B 3020は、東区の東寄りにある桁行9間以上、梁間2間に復元できる南北棟である。北端が調査区外にあるため桁行の規模が確定できなかったが、桁行の総長は21.2m以上ありかなり大規模な建物となる。柱間寸法はばらつきが多いが桁行・梁間ともに2.4m（8尺）等間と考えられる。柱掘形は長辺が1～1.5m大の長方形を呈するものが多い。建物の方位は北で西に1度前後振れる。8世紀後半の礎石建物 S B 3040の礎石据え付け穴の下層で一部の柱穴を検出しており、また、掘立柱建物 S B 3010の柱穴との重複関係も古い。柱穴の一部から7世紀後半から藤原宮期にかけての土器が出土した。

掘立柱塀 S A 3025は、東西に並ぶ長辺1.4mの長方形の掘形2箇所を検出した。東西塀の一部と思われるが、柱間寸法は6mと広い。径25～30cmの柱を北へ抜いた抜き穴があり、西の掘形の抜き穴からは7世紀前半代の軒丸瓦が出土した（奥山・久米寺IV A型式）。

礎石建物 S B 3030は、建物の北東部分が削平を受けているが、花崗岩礎石1箇所が旧位置に遺存するほか、礎石の据え付け位置を示す根石群や、抜き取られた礎石の表面の風化部分が皮状に遺存する例も多く、桁行3間、梁間3間の総柱建物に復元できる。柱間寸法は桁行が2.46m（総長7.38m）、梁間は中央間が2.3m、両端間が1.7m前後（総長5.75m）である。遺存する礎石の大きさは長辺1mほどあり、上面を叩いて平坦に整形する。建物の方位は北で西に2度ほど振れる特徴をもち、礎石据え付け穴から8世紀後半の土器と丸・平瓦の小片が

出土した。礎石抜き取り穴は遺構検出面よりかなり上で認められ、また、礎石の痕跡が良好な状態で残されていたので、大部分の礎石が畑地として開墾されるまで遺存したものと推定される。

礎石建物 S B 3040 は、S B 3030 とその西側柱筋をほぼ揃える桁行 3 間、梁間 3 間の総柱建物に復元できる。東の柱列が調査区外にあり、削平が著しいが、南西隅の花崗岩礎石が旧位置を保つほか、移動した 2 箇の礎石が傾斜面の畦畔の土留めなどに利用されて残る。また、礎石の据え付け痕跡を示す根石や、抜き取られた花崗岩礎石の表面の風化部分が遺存し、礎石の下半部の形状が推定できる例も多い。遺存する礎石の大きさは長辺 1 m ほどあり、上面を平坦に加工する。柱間寸法は桁行が 2.7 m 等間（総長 8.1 m）、梁間が 2.33 m 等間（総長 7 m）で、S B 3030 よりこちらの方がわずかに大きい。建物の方位は、これも北で西に 2 度ほど振れる特徴をもつ。なお、S B 3030 の北柱列と S B 3040 の南柱列の距離は 7 m で、S B 3040 の梁間総長と等しい点が注目され、またその柱筋をほぼ揃えるなど、計画的に配置された瓦葺きの倉庫群の一部をなすものと推定される。

掘立柱塀 S A 3035 は一辺 40～80 cm の柱掘形 4 箇を検出した。柱間寸法は 3 m である。

掘立柱塀 S A 3045 もほぼ同大の柱掘形 3 箇を検出した。このふたつの塀の間隔は 6 m で柱間寸法の倍であり、対応する柱位置もほぼ揃っており、一棟の東西棟建物になる可能性も考えられる。しかし、建物とした場合、梁間寸法が広い割には柱掘形が浅く、かつ小さいのでとりあえず 2 条の東西塀とし、西側での調査を待つことにしたい。方位は両者とも北で西に 7 度の振れをもつ。

掘立柱建物 S B 3050 は、第 71-9 次調査で柱穴 5 個を、第 71-14 次調査区内で柱穴 3 個を確認し、桁行 6 間以上の南北棟建物であることが判明した。柱間は桁行 2.4 m 等間で柱痕跡の規模から柱は直径 0.2 m ほどと推定される。梁間は 2.25 m に復元できる。柱掘形の大きさは、一辺が 1.1～1.3 m 大、深さ 0.6 m の方形掘形で、建物の方位は北で西へ約 1 度傾く。建物柱穴は後述する下層大溝 S D 3100 の埋め土及び整地土を切り込んでおり、柱穴にはそれらの 7 世紀前半代

の土器とともに7世紀後半に下がる可能性のある小片もわずかに含まれていることから、建物の造営は7世紀後半以降と考えておきたい。また、廃絶の年代については柱穴の一部が井戸S E 3090の掘形によって毀されているので、8世紀末以前であることが判明する。

土坑S K 3041は、径2m、深さ0.2mの浅い土坑である。

井戸S E 3055は、径1.8m、深さ3.5mの掘形をもつ。硬い茶黄褐色粘土層を掘り抜いて岩盤近くまで達しているが、現在でも湧水がまったく見られないので、掘削途中で放棄したものと推定される。規模や掘形の形は、Ⅱ区で検出した井戸S E 3090に類似する。

土坑S K 3057は、建物S B 3050の下層に広がる浅い溝状の土坑である。一部を断ち割って調査したのみで全形は明らかではないが、Ⅱ区で検出した下層大溝S D 3100と時期的にも性格的にも似た遺構と推定され、「城山」の東斜面にあった幾筋かの溝状のくぼみが埋没したものであろう。埋め土から7世紀前半代の土師器・須恵器、古墳時代の円筒埴輪片などが出土した。

I区 第71-9次調査区から延びる南北溝S D 3083の他に、掘立柱建物2棟、南北溝1条、東西溝1条、土坑4基がある。

掘立柱建物S B 3080は、柱間2.1m等間で南北に並ぶ3個の柱穴を検出した。東を確認していないが東西棟建物の西妻柱列と考えられる。柱穴は東に下降する地山岩盤上に施された厚い整地土層上面から掘り込んだ一辺0.6mの略方形の掘形で、その西寄りに直径0.25mの柱抜き取り穴をもつ。柱穴の一部から外面を削るc手法の土師器杯Aの破片が出土したことから奈良時代後半の建物と考えられる。なお、建物は国土方眼方位に対して北で西へ約2度傾く。

掘立柱建物S B 3081は一辺0.4m、深さ0.3mの柱掘形に直径0.15mの柱痕跡をもつ。1個の柱穴の規模が異なる点で疑問が残るが、南北2間（柱間1.5m等間）、東西2間以上（柱間1.55m等間）の東西棟建物に復元され、建物方位は北で西へ約1度20分傾くようである。

南北溝S D 3085は建物S B 3080の西約3.3mにある素掘り溝で、S B 3080の北側柱列の北0.6mの位置に始まり南流する。始まる位置から建物の西を限る溝

と考えられる。暗灰褐色砂の溝埋土には奈良時代末から平安時代初め頃の土器と平城宮の軒平瓦6691Aをはじめとする奈良時代の瓦が少量含まれている。

この溝の周囲には南北4.3m、東西1.8mの楕円形を呈する浅い土坑S K 3084があり、暗灰褐色粘土の埋め土には炭と小円礫が混じる。この土坑は南北溝S D 3083よりも新しく、南北溝S D 3085より古い重複関係にあるが、遺物の上からは細かな年代差を把握できない。

東西溝S D 3082は建物S B 3080の南3.8mにあり、幅0.8m、深さ0.4mで暗灰色砂質土で埋まっている。西壁から旧水田畦畔までの長さ2m分を検出した。埋め土には炭化物とともに奈良時代末～平安時代初めの土器が含まれる。

調査区南端のS K 3086・3087はともに地山の岩盤に掘り込まれた大きな土坑で、茶褐色粘土で埋められている。S K 3086は山田道第5次調査区で一部確認した土坑で、南北4m、東西1m程の規模が判明した。長辺側の壁が垂直であるのに対して、短辺側は緩やかに傾斜する特徴がある。周辺の地山は風化した花崗岩層であり、先の調査の「粘土の採集坑」との見解には疑問が残る。

Ⅱ区 主な遺構には第71-9次調査区からのびる建物S B 3050のほか、掘立柱塀S A 3095、礎石抜き取り穴S X 3101、井戸S E 3090、礎石落込み穴S X 3099と下層大溝S D 3100がある。

井戸S E 3090は直径2.5m、深さ3.9mの掘形の底に、断面15cm角の角材で内法一辺0.84mの井桁を組み、その四隅に柄穴をあけて断面10cm角の柱を立て、その外側に長さ116cm、幅約30cm、厚さ5cmの板材を積み上げて井戸枠とする。井戸枠は枠板5枚、高さ1.5m分より上が後に破壊され、枠内についても井戸底の10cmほどの暗灰色粘土より上はすべて周辺の山土によって周到に埋められており、暗灰色粘土層にも顕著な遺物は残されていない。遺存する井戸枠の直上には2m大の大石と多量の栓皮が投棄され、最上層は底の丸い土坑状をなして、厚さ50cmにわたって炭化物、土器、瓦などが多量に捨てられている。最上層の土器は平城宮土器編年のV～VIの時期のものが主体で、瓦には打ち欠いて隅軒平瓦とした軒平瓦6691Aがある。それらの遺物からは、周辺に奈良時代末に廃絶した栓皮葺きの建物、寄棟或いは入母屋式の瓦葺屋根を持つ建物の存在

が想定される。

礎石抜き取り穴 S X 3101は調査区の中央西寄りにあり、穴の壁面には花崗岩礎石の表層が貼りついている。S X 3101には一辺1.8m、深さ0.6mの方形の据付掘形が確認され、これが礎石建物の一部であることが判明した。調査区内にはこのほかに礎石として十分使用できそうな多数の大型石塊と、その抜き取り穴や落とし込み穴がみられるが、据え付け掘形をもつ石の抜き取り穴はこれのみである。北半部が近年の削平によって深く破壊されており、礎石建物の規模構造については西側の道路敷下での調査成果を待って検討したい。

掘立柱塀 S A 3095は調査区南端で検出した0.5m大の楕円形平面の小規模な柱穴3個で、柱間は約1.5m等間。東で北へ約30度傾く方位をもつ。埋土が建物 S B 3050柱穴周囲に広がる黄灰色砂質土に類似し、建物方位が下層の大溝の方位に近いことから整地と一体の施設である可能性を持つが、柱穴出土遺物からは年代を限定できない。

下層大溝 S D 3100は建物 S B 3050の西側で整地土を除去して検出し、調査区北半の断面等で確認した。そのため規模や流れの方向は定かでないが、全体の溝幅6m、深さ0.8mで北東から北へ緩やかに弧を描きながら幅を増しているようである。溝の中央部には幅3m、深さ0.3mの灰色粘土の深みがあり、7世紀初めから前半代の土師器・須恵器、木質物、大・中型石塊が多量に含まれている。溝の底は比較的平坦で、一部の薄い細砂層を除けば粘質土の堆積であって特に急激な流水があった形跡はうかがえない。大溝の上流側は10m未満で「城山」の北斜面に到達する位置にあることからすれば、通常の谷間の流路ではなく堀割状を呈していたものと想定しておきたい。なお、奈良時代の遺構面全域に散乱する大小の石塊や土器片については、この大溝の堆積土および埋立て整地土中に含まれたものと考えられる。

**Ⅲ区（西区）** Ⅲ区には掘立柱建物 S B 3060のほかに、素掘り溝 S D 3105・3110、小さな土坑 S K 3107などがある。また、素掘り溝の東南部で、溝に平行して地山を深さ0.8m掘り込み、明茶褐色砂質土で埋めた地業状の整地土 S X 3109を確認した。

掘立柱建物 S B 3060はその整地土の上面から柱穴を穿っている。南北に並ぶ一辺 1 m 前後の方形の柱穴を 3 個検出したのみであるが、柱間寸法は 1.75 m。後述するように素掘り溝 S D 3105・3110・3082を雨落溝として伴うとすれば、建物の西北隅を検出したことになる。建物の方位は、北で東へ約 2 度振れる。

南北溝 S D 3105は幅 0.5 m、深さ 0.4 m の U 字形の溝で中央部の幅 0.25 m については一段深い。長さ 3 m で東折し東西溝 S D 3110となる。S D 3110は概ね I 区の S D 3082に向かってのびており、溝の埋土や出土遺物が類似することから両溝が一連のものである可能性がある。また、S D 3105・3110は S B 3060の北と西それぞれ 2.1 m の位置にあり、溝が建物の雨落溝として機能していたことが想定される。地業状の整地土からは奈良時代前半の土器小片が出土し、素掘り溝 S D 3105・3110には奈良時代末～平安時代初めの土器が含まれる。

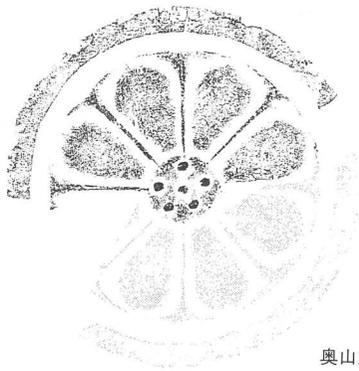
#### 出土遺物

土器・瓦埴類・金属製品・石製品・土製品・円筒埴輪などがある。

土器は 6 世紀末～9 世紀にかけての須恵器・土師器がある。このうち、II 区の下層大溝 S D 3100と、東区の下層土坑 S K 3057から 7 世紀初めから前半代にかけての土師器・須恵器がまとまって出土した。これ以外には奈良時代末から平安時代初めにかけての土器が多い。

瓦の出土量は全体に少ないが、少量の 7 世紀代のものを除くと、奈良時代のもものが多数を占める。軒瓦は 9 点あり、そのうちの 1 点は、S A 3025の柱抜き穴から出土したもので、兵庫県明石市高丘窯で焼成され、飛鳥の豊浦寺や奥山・久米寺に供給されたことが判明している単弁 8 弁蓮華文軒丸瓦 (IV A 型式) である。また、大官大寺式の軒平瓦 6661 B が 1 点ある。

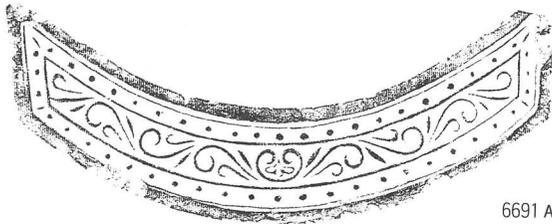
それ以外は、平城宮と同範、あるいはその可能性が高いもので、軒丸瓦 6012 C ? ・6285 A ? と、軒平瓦 6663 A ・6691 A (打ち欠いて隅軒平瓦とするもの 1 点を含む 3 点) ・6721 C (2 点) があり、軒平瓦 6574 は難波宮所用品と同範の A である可能性があるものである。また、厚さ 7 cm の埴が S B 3030の礎石の根石に用いられており、S K 3014からも出土した。両者は接合して一辺 30 cm 以上の大きさに復原でき、表面に斜格子文をへらで刻む。奈良時代の軒瓦の出土量



奥山久米寺 IV A



6721 C



6691 A



6663 A



6661 B

Fig.18 第71-9・14次調査出土軒瓦(1:4)

はごく少なく、これだけで瓦葺建物の存在を断定するのは危険だが、2棟の礎石建物は瓦葺きの倉庫風建物であった可能性が強いことを指摘しておきたい。

金属製品には、釘・刀子・鏃・鋸・紡錘車などの鉄製品が少量ある。

石製品には砥石があり、他に凝灰岩質砂岩の切石・室生安山岩の板石が出土した。

土製品には、S B 3030の礎石抜取り穴から出土した大型の円面硯がある。

#### まとめ

今回の調査では、当初予想した以上に大きな成果が得られ、雷丘東方遺跡の年代や性格に関しても、つけ加えるべき新たな知見がいくつかあった。以下、簡単に今回の調査成果をまとめておく。

① 雷丘東方遺跡は7世紀前半代に始まっている。

Ⅱ区で検出したS D 3100は「城山」の北麓から北東へ流れる幅広い溝であるが、堆積層の様子からは急激な流れとは考えられず、水の滞留する堀割のような溝と考えられる。出土土器には6世紀末から7世紀前半までのものが含まれており、推古天皇の小墾田宮と関連する可能性をもつ点で周辺での今後の調査が期待される。

② S B 3020・3050は柱間8尺の長大な建物である点で類似している。またS B 3020の北端とS B 3050の南端とは桁行柱間にして5間分離れ、建物の方位も近似しており、両建物は同時期に存在した可能性が高い。柱穴から出土した土器はわずかで、その年代を明らかにできないが、最も新しいものは飛鳥Ⅳ～Ⅴの時期に比定され、建物群は雷丘東方遺跡の第1次調査で検出した南北溝S D 110などと同時期の、天武朝から藤原宮期に位置づけられる。

③ 東区で検出した2棟の礎石礎石建物は、規模に相違があるが、建物の方位や柱筋の一部を揃えるなど奈良時代後半のある時期に同時に存在した倉庫風建物である可能性が高い。また、Ⅱ区で検出した礎石の抜き取り穴S X 3101は、わずかに1個を確認しただけであるが、丘の北東斜面部にも礎石建物が存在することを示している。礎石建物の時期を明確には出来なかったものの、7世紀前半の大溝を埋め立てた整地よりも新しく、7世紀後半代の建物と共存した可能性をもつ。

このように、雷丘東方遺跡については、7世紀前半代に遡る遺構や、7世紀後半代の大規模な建物があることなどが新たに判明した。これらの遺構の性格についてはこれからの調査の進展にまたれる点も多いが、今回の調査区は、第1次調査区や、「小治田宮」と書いた墨書土器が発見された井戸から北々西へ約80mの至近距離にあり、両者の関係が当面問題となろう。

第1次調査区で検出した遺構のうち、Ⅱ・Ⅲ期の建物の造営方位は、真南北に対して北で西に約4度振れる特徴をもつことが指摘されている。今回検出した礎石建物もほぼ同じ振れをもち、また礎石据え付け穴から出土した土器や瓦から、この建物が奈良時代後半に建てられたことも判明している。したがって、第1次調査区と今回の調査区の間、造営年代や造営方位に共通点があること

が認められよう。また、これまで推定山田道を雷丘東方遺跡の北限とする説もあったが、今回の調査区、およびその北で実施した第71-10次調査区で検出した築地の基底部と推定される土塁状の遺構や大溝の存在によって、その範囲がさらに北に広がり、南北の規模が少なくとも200m以上はあることが推定されるようになった成果も大きい。

このように遺構の広がりや倉庫群を伴うという特色が確認された意味において、これまで雷丘東方遺跡と仮称してきた遺構群を、奈良時代の小治田宮に比定しうる可能性はより高まったといえよう。そこで、改めて1/1000地形図で現地を見直すと、飛鳥川が西から北へ大きく屈曲する、その右岸に並ぶ「城山」と「上ノ山」にはかなり人工的な地形が目立つ。「城山」の頂上にある平坦地と中央を南北に走る空堀、ならびにそのまわりの急斜面は、地名からも中世の城跡であることは明らかである。したがって、周辺にこれ以外の中世の城関係の遺構が存在する可能性が考えられるが、今回の調査範囲内ではこの時期の遺構・遺物はほとんど認められず、中世の城関係の遺構のひろがりや範囲ではないことが予想される。「城山」の裾には、幅20mほどの平坦地が鉢巻状に取り巻いており、また「上ノ山」の東斜面にも東西の幅が30mほどの平坦地が3段ほど認められる。いずれも自然地形とは見なし難いものであり、これらは奈良時代の小治田宮の造宮、あるいはそれ以前に遡る宮あるいは官衙の造宮に際し削平整地された地形である可能性が高い。これらの平坦地にも、今回検出した遺構と共通する性格をもつ建物群の存在を推定し、今後の調査と保存に万全を期したい。

一方、今回の調査は、山田道が従来の推定線に沿って存在したのか否かという新たな課題を投げかけることにもなった（p.118参照）。奈良時代の小治田宮が先に推定した範囲内に存在したとすれば、少なくともこの期間、山田道は別のルートをとっていたと考えざるをえないからである。山田道の位置は、飛鳥の諸宮や寺院・官衙の配置を復元する上で、きわめて重要な意味をもつ。その意味でも、雷丘東方遺跡周辺の調査は今回の調査で新しい段階に入ったといえ、今後、周辺地域における計画的な調査が不可欠となった。

## B 第71-10次調査

(1993年11月～12月)

この調査は第71-9次調査に引き続いて実施した県道飛鳥樫原神宮停車場線の拡幅に伴う事前調査である。調査は第71-9次・第71-14次調査地の北約200m分について、現県道の東側に東西幅2～2.5mの調査区(I～V区)を、県道の西側に2カ所の調査区(VI・VII区)を設けて行った。調査地は藤原京の左京三坊地内の十一條と十二條とにまたがり、また、奈良時代の小治田宮の一面を占めるとされる雷丘東方遺跡に北接する位置にある。調査は藤原京条坊関連遺構と奈良時代の遺構の確認を主な目的として実施した。検出した主な遺構にはI・II区に奈良時代の築地基底部と内濠、III・IV区に藤原宮期の大溝、土坑、7世紀後半代の整地、V区に柱穴と土坑、VI区に7世紀後半の掘立柱遺構、土坑及び平安時代以降の井戸2基、VII区に掘立柱建物1棟と土坑数基があるが、それぞれの調査区が極めて狭長であることから、片鱗を確認したにとどまり内容の把握に不十分な点が多い。以下、調査区別に概要を報告する。

**I・II区** 南端のI区は地形的には雷丘の北縁辺部から裾にあたる。細い里道であった現道路の建設時には北側の低地との比高は現状よりもさらに大きく、丘陵部の一部を削平するとともに、その土を北の道路建設にあてたとされている。調査の結果、調査区の西南部では耕土・床土の直下で地山花崗岩岩盤が露出し、東北部には急激に下降する地山岩盤の傾斜面上に茶褐色砂質土が厚く広がる。砂質土上面と地山岩盤上で中世～現代の南北方向の小溝が検出された。遺構はこの数次にわたる整地土層とそれぞれの上面から掘られた小溝だけである。地山岩盤はI・II区の境をなす畦畔下から急激に北に下降している。

II区はI区よりも約1.2m低い水田であるが、水田面下約0.4mの床土下面で遺構を検出した。検出した遺構には築地基底部と判断される土塁状の高まりSX3130、その南の大溝SD3131、外側の濠状遺構SD3132などがある。

土塁状の高まりSX3130は基底部幅3.6m、上端幅2.3mの断面台形を呈し、ほぼ東西方向に延びる。長さ2.0m分を検出した。SX3130は地山岩盤の落ち込み上に堆積した灰褐色砂礫層の上に、厚さ0.2mの灰色粘土と厚さ0.5mの赤褐

色砂質土を積み上げて築成されている。北と南の傾斜面には幅0.2mで灰色粗砂が堆積し、その下面に桧皮と思われる木質物が薄く貼り付いている。灰色粗砂は崩れにあたり、木質物の存在からS X 3130は築地の基底部と推察される。なお、北縁部に上面の平らな石があり築地の寄柱とも考えられたが、掘形が確認されず積土中に偶然に平らに入り込んだものと判断した。

大溝S D 3131は幅4.2m、深さ1.4mの素掘り溝で、I区とII区との間の水田畦畔直下で急激に下降する地山岩盤の北端に南岸を置く。南岸は地山上に積んだ最大厚0.4mの整地土の上面から掘り込んでいる。埋土は大きく3層に分かれ、上から灰色粘土、暗青灰色粘土、暗灰色礫混り粘土である。上半の厚さ0.6mを占める灰色粘土層の下面は築地基底部S X 3130の積土下面と高さが揃う位置にあり、それ以下が溝の堆積層とみられる。灰色粘土層は桧皮を含むS X 3130の崩れの上に堆積しており、遺跡の廃絶後に埋められたものと判断される。灰色粘土層から奈良時代末～平安時代初めの土器と瓦が出土し、下の堆積土にも奈良時代の土器、瓦が少量含まれている。

築地基底部S X 3130の北は、検出面から0.4m下までが廃絶後の埋め立て土に相当し、その下面には基底部北端から約4mの位置に奈良時代の瓦と中型の石塊で構成される幅0.6mの乱雑な石列S X 3134が、さらに北1.5mのII区北端には断面10cmの角材S X 3135が東西方向に埋められている。S X 3130の築成時の遺構面はそれらの下面であり、S X 3130の存続期間中の補修に関わるものと想定しておきたい。

Ⅲ・Ⅳ区 Ⅲ区はII区より約0.3～1.0m低い2枚の水田を対象とし、Ⅳ区はⅢ区と同一面にあることから調査区を分割しなかった。層序はⅢ区からⅣ区南半までの間は床土層とその下の灰褐色粘土層が分厚く、遺構検出面の高さではⅢ区の南端はII区の築地基底部上面よりも約1～1.2m低い。Ⅳ区北半は地山の黄色粘土が高くなり、築地基底部上面との差は0.7mで、その間が谷状を呈す。

南端の大溝S D 3140は、調査区南端から北7.5mに北岸があり、南岸はII区とⅢ区の境をなす畦畔下にある。深さは検出面から1.1m。埋土は上の炭混り褐色土層(S D 3140B)と下の灰色～青灰色砂質土層(S D 3140A)に大別され、

7世紀後半から藤原宮期の土器が比較的多量に含まれる。下層の中には東北方向に長細く延びる石塊の集積 S X 3141 が 2 面にわたって認められ、南側に存在した構築物が崩れ落ちたものと思われる。なお、検出面の直上には奈良時代の瓦を含む淡灰色粘土が分厚く堆積し、奈良時代の遺構面を形成していたと考えられるが、その上面では小溝以外の遺構は検出されなかった。

大溝の北には南北幅10m程にわたって黄色粘土を含む積土層 S X 3145 がある。古い自然流路である灰色細砂の上に厚さ0.3mで炭化物と黄色粘土を互層に積んでいる。炭化物層からは7世紀後半の土器が少量出土した。素掘り溝 S D 3146 はこの積土層上面から掘り込む溝で、幅0.6m、深さ0.3mである。埋土の暗灰褐色粘土には藤原宮期の土器が少量含まれる。

黄色粘土の積土層 S X 3145 の北25mについては、S X 3145 を覆うように暗灰褐色粘土層 S X 3165 が厚く堆積する。暗灰褐色粘土層の北端はIV区北端の黄褐色粘土の地山の南への傾斜面上に積んだ赤褐色粘土の整地を覆っており、中央部で0.5m以上の厚みをもつ谷状地形の埋め立て土とみられる。暗灰褐色粘土層には所々に、炭化物と藤原宮期の土器を多く含む部分 S X 3160 や、直径2m程の範囲の小石の集積 S X 3155 があるものの、それらは藤原宮期に施された整地の用材の相違と考えられる。この上面で検出した幅0.5m、深さ0.3mの素掘りの東西溝 S D 3150・3153・3154・3156～3158・3161からは藤原宮期の土器が少量出土し、先の東西溝 S D 3146 とともにいずれかが藤原京の条坊関連遺構である可能性が考えられるが、ともにこれまでに左京域で確認している条坊遺構から推算した十一条大路の側溝の位置と合致しない。

IV区北端に広がる黄褐色粘土の地山は南7.5mから南に下降する。その傾斜面上に積んだ赤褐色粘土の整地土層 S X 3170 の北縁部は深さ0.2m、幅0.6mで2段に掘られた溝底状をなす (S X 3171)。整地土はこの段に合わせた上下2層に大別され、下層から比較的多量の7世紀後半代の土器が出土した。底面は南に深くなるが、上面もまた緩やかに下降し、その上に奈良時代以降の包含層が堆積する。従って確認される整地土の厚さは最大で0.5mとなる。S D 3166 は整地土上面で検出した素掘り溝で溝幅0.6m、深さ0.5mで東西方向に延びる。

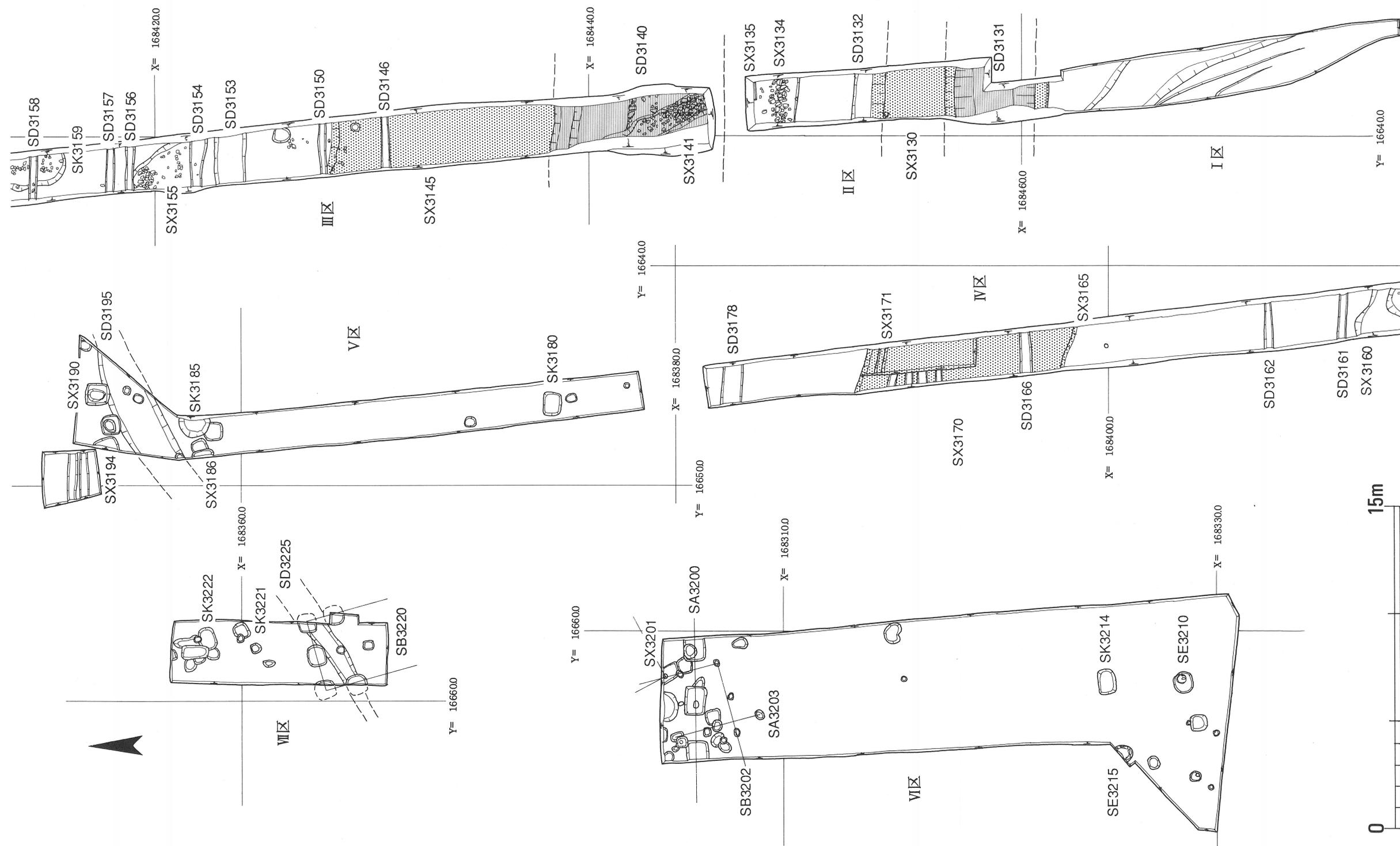


Fig.19 第71-10次調査遺構図 (1:200)

**V区** 調査区全域について床土の直下で地山の黄褐色粘土が露出し、その上面で柱穴、土坑を確認した。柱穴は調査区北端に集中し、掘形の辺の方向によって2種に区分されるが、建物としてまとめるには至らない。掘形が北で西へ約30度傾く方位に掘られた2個の柱穴S X 3186・3194は掘形下半部が小円形を呈する二段掘りで深さ0.8m。柱穴からは7世紀代の土器が少量出土した。この2個の柱穴の間には同方向の斜行溝S D 3195がある。埋土は褐色砂土で7世紀後半の土器が少量含まれる。方向からはVII区の溝S D 3225と一連とみられる。S K 3185は東壁添いにある直径1.5m、深さ0.5mの掘り鉢状の土坑で、埋土には奈良～平安時代の土器が少量含まれる。なお、土坑S K 3180など南半部の遺構は極めて浅く、地山は後世に著しく削平されているとみられる。

**VI区** 道路東の比較的広範囲な調査区で、耕土直下の地山黄色粘土或いは岩盤の上面で遺構を検出した。東西掘立柱列S A 3200は一辺1×1.4mで東西に長い方形掘形で、深さ0.6m。柱間は2.4m等間である。埋土からは7世紀後半の土器が少量出土した。周辺には、これよりも古く掘形の辺が北で西へ傾く方位の柱穴S X 3201や、底に小石を数個敷いた小柱穴があるがいずれも建物にはまともまらない。他に小型円形柱穴4個で構成されるS B 3202、3個の柱穴からなるS A 3203等があるがいずれも確定的でない。曲物井戸S E 3210は直径1m、深さ0.9mの掘形底に、直径40cm、高さ40cmの曲物を3段以上積み上げる。埋土からは黒色土器、土師器、須恵器の小片と瓦片が出土し、平安時代前期とみられる。石組井戸S E 3215は地山黄色粘土に掘り込んだ直径0.9m、深さ0.4mの掘形の底に、小児頭大の川原石を組んで内径0.5mの枠とする。石組は1段、高さ0.2mが遺存し、上部は破壊されている。埋土からは平安時代の土器が少量出土した。方形土坑S K 3214も出土遺物から平安時代以降の時期と推定され、南半では藤原宮期前後の遺構は検出されなかった。

**VII区** 耕土・床土下の地山黄褐色土面で掘立柱建物、土坑、素掘り溝を検出した。建物S B 3220は北で西へ約16度傾く方位の南北棟建物で、一辺0.8m、深さ0.7mの掘形に、直径0.25mの柱抜取穴をもつ。柱間は桁行梁間とも1.5mであろう。斜行溝S D 3225と重複しそれよりも新しい。掘形埋土からは7世紀代の土

器が少量出土した。斜行溝 S D 3225は幅 1 m、深さ 0.2m の素掘り溝で、褐色砂土の埋土からは 7 世紀代の土器が少量出土した。この他に小型柱穴 S X 3224 や小石が多数入る土坑 S K 3221・3222があるが時期などは不明である。

#### まとめ

Ⅱ区で検出した土塁状の高まり S X 3130は、斜面に桧皮が貼り付いていたことから築地の基底部と判断された。北面は石列 S X 3134と角材 S X 3135などで補修した平坦面からさらに一段下がるようであり、南側の大溝 S D 3131を内濠として遺跡の北を画する外郭施設を構成する。S D 3131出土遺物からみると、外郭施設は奈良時代末から平安時代初めに廃絶したとみられ、近年の調査で奈良時代の「小治田宮」の可能性が高くなった雷丘東方遺跡のⅡ～Ⅳ期の遺構群と時期的に並行する。この S X 3130等の位置を周辺の地形に照らしてみると、西側では「雷池」の南堤とその西に延びる段差のある畦畔の位置に符合し、東側にも同様の畦畔が延びる。また、この位置は高市郡路東条里の坪境にあたり、「小治田宮」の外郭施設が遺存条里に反映されているともみられる。

S X 3130は「小治田宮」の墨書土器が出土した井戸の北約 180m に位置し、周辺の地形を勘案すると、奈良時代の「小治田宮」は「上ノ山」を含めた飛鳥川までの南北 300m 程の範囲と推定される。東西幅については「推定山田道」の調査で遺構が検出されていないことから確証に欠けるが、飛鳥川東岸を西限とし条里坪境である飛鳥川からの南北水路までの約 300m 程と考えておきたい。

Ⅲ区とⅣ区との間に想定された藤原京十一条大路は検出されなかったが、その想定地は藤原京期には谷状の低湿地であったことが判明した。低湿地には 7 世紀後半に北端と南半とに盛土をし、南岸付近に大溝を掘削していることを確認したが、それらに伴う柱穴などは検出されていない。藤原京十一条大路については、より条件の良い地点での検出が期待される。

Ⅵ区の掘立柱列 S A 3200は建物の南側柱列である可能性があるが、十一条大路想定地の北約 117m にあり、十一条々間路にほど近い左京十一条三坊東南坪内の遺構である。しかし調査区内では、これ以南の遺構が極めて希薄であることから、坪内の利用形態を含めた性格の究明は困難である。今後の調査を待ちたい。

### 3 左京のその他の調査

#### A 左京四条四坊の調査（第71－6次）

（1993年8月）

この調査は個人住宅建設に伴い橿原市膳夫町で行ったものである。調査地は左京四条四坊西北坪の中央部やや東南寄りに当り、第63－13次調査地の西方約100mである。南北10m、東西10mの範囲を調査した。層序は上から耕土・床土・灰色粘質土・褐色砂質土の順で、褐色粘質土の上面で遺構を検出したが、藤原宮期の遺構は皆無で、遺物もほとんどない。

#### B 左京六条三坊の調査（第69－14次）

（1993年3月）

この調査は、宅地造成に伴い橿原市木之本町で行ったものである。調査地は左京六条三坊西南坪の東北角に近く、第45～47・50・53次調査で検出した、四町占地の官衙と思われる建物群の西半部分にあたる。南北5m、東西7mの範囲を調査した。層序は上から盛土・耕土・床土・茶灰褐色砂質土・灰褐色粘質土・茶褐色粘質土の順で、茶褐色粘質土の上面で、南北溝S D 7870と小穴2箇所を検出した。南北溝S D 7870は、幅50cm、深さ45cmの断面逆台形を呈する溝である。埋土には古墳時代の土師器・須恵器を少量含むが、この溝が掘削された時期は不明である。なお、遺構面を覆う灰褐色粘質土から丸・平瓦が少量出土した。これは木之本廃寺出土のものと胎土・焼成・製作技法が一致する。

#### C 左京八条四坊の調査（第71－5次）

（1993年6月）

この調査は、個人住宅及び倉庫建設に伴い橿原市南浦町で実施したものである。調査地は香久山の南裾部で、左京八条四坊西南坪および八条大路想定位置にあたる。東西2m、南北11mの調査区を設定した。約60cmの耕土下で岩盤に達し、中世の斜行溝1条を検出したが、藤原宮期の遺構は確認できなかった。

#### 4 右京二条一坊の調査（第71－3次）

（1993年4月）

この調査は、駐車場造成に伴い橿原市醍醐町内で実施したものである。調査地は、宮北面中門の北々西約90mに位置し、宮の北辺を東西に走る二条大路の北側溝が予想されたため、南北9m、東西3mの発掘区を設けた。二条大路に関しては、当調査部の調査（第33－3、39、58－13～15次等）や奈良県教育委員会（1967年）及び橿原市教育委員会（1991年）の調査で、大路の北及び南側溝が検出されている。

調査区の基本的な土層は、上から盛土（約50cm）、耕土、床土、茶褐色土と続き、地表面から1.1m下にある黄褐色微砂土ないしは茶褐色土の上面で、藤原宮期の遺構を確認した。

検出した遺構には、二条大路北側溝、柱穴、井戸があり、他に小穴や小溝などがある。調査区の南端付近で検出した東西溝SD8040は、幅1.3mの素掘りの溝で、深さは15cmしかなく、東端へはさらに浅くなって幅をせばめる。検出位置から二条大路北側溝と考えたが、出土遺物も極めて少なく、なお問題を残す。

側溝の北岸から北約3.5mで一辺1.2mの柱穴を検出した。大路に平行して設けられた東西堀の可能性もあるが、調査区の関係でそれ以上の調査はできなかった。この柱穴に重複する井戸SE8042は、径1.5mの円形の平面を持ち、柱穴よりも古い。井戸や柱穴はいずれも、約50cmの深さしかなく、先述の溝の状況からも、この付近の遺構面は1m近く削平されている可能性が強い。

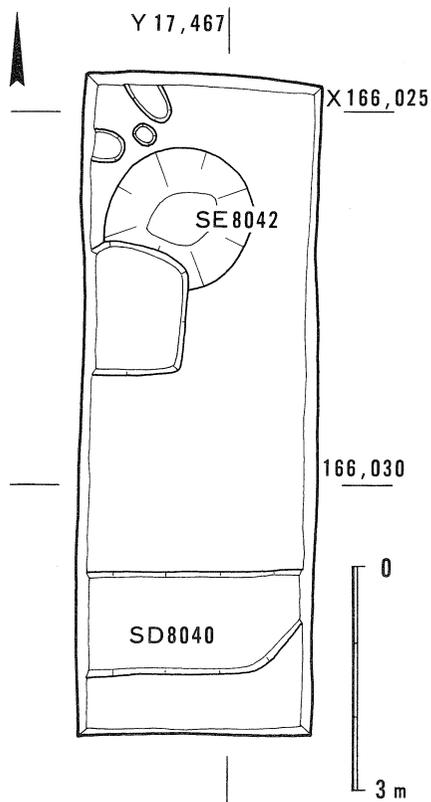


Fig.20 第71－3次調査遺構図（1：100）

## 5 右京五・六条三坊の調査

### A 第69-12次調査

(1992年12月～1993年4月)

この調査は、県道豊浦南八木線の道路建設に伴う第2次調査として、橿原市四分町と縄手町で行ったものである。調査地は、第1次(第69-9次)調査区の北にあたり、藤原宮の西南隅近くの外周帯から、藤原京右京五・六条三坊にかけての一带で、また弥生時代の四分遺跡の西端に近い場所にもあたる。調査地には、南北に流れる水路と東西に走る里道が存在するため、調査区を4箇所に分け、南から順に第69-12次Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区と呼び、北接する第71-1次Ⅰ区、Ⅱ区と区別した(Fig.21)。

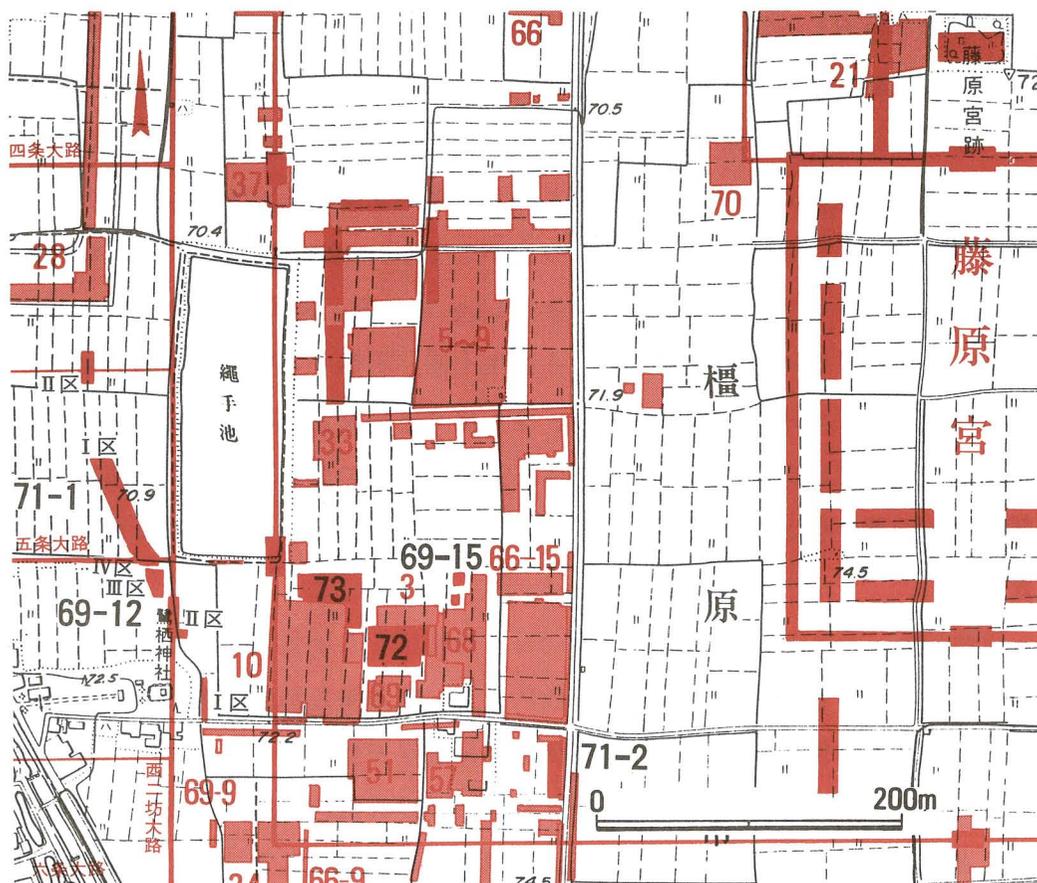


Fig.21 第69-12・第71-1次調査位置図(1:5000)

## I 区

鷲巢神社の東に位置する東西7m、南北30mの調査区である。基本的な層序は、上から順に盛土・耕土・床土・淡黄灰色砂・暗青褐色粘質土、暗青灰褐色粘質土（古墳・弥生時代包含層）となる。上層遺構の検出は暗青灰褐色粘質土上面で行ったが、飛鳥川の氾濫による砂層の堆積が厚く、藤原宮期の遺構はかなり削平されている。

**上層遺構** この遺構面で検出した遺構は、柱穴S X 7824、浅い南北溝のなごりである溝S D 7822、円形の土坑S K 7823のみである。柱穴S X 7824は、溝S D 7822を掘り下げて検出したが時期は不明。円形土坑S K 7823からは、10世紀後半の黒色土器が少量出土した。

**下層遺構** 調査区南半に東西3.3m、南北11.5mの調査区を設け、下層の弥生時代の遺構を検出した。上層の遺構検出面から0.5mほどの間は、粗砂混じりの暗青灰褐色粘質土の下に暗褐色粘質土が堆積し、弥生時代後期の土器片を下にいくほど多く含む。その下で、弥生時代の遺構面である粗砂混じり緑褐色粘質土層に達し、南北大溝の東肩を検出した。西壁が崩壊する危険があったために、大溝の西肩は正確には把握できなかったが、幅2.6mほどと推定され、溝の断面形は幅の広いU字形を呈する。深さは1.1mである。溝内の堆積土は、基本的には上層と下層に分かれ、上層から弥生土器、石鏃・石包丁・片刃石斧などの石器、鍬などの木器、骨製刺突具、鹿・猪などの獣骨が出土した。土器は中期前葉から中葉にかけてのものが主体を占め、前期のものをごく少量含む。下層には木の葉や枝が大量に堆積していたが、人工遺物はほとんど含まない。

## II 区

東西16m、南北24mの範囲に、幅5.5mの発掘区をL字形に設けた。基本的な層序は、上から耕土・床土・淡黄灰色粘質土・暗黄褐色粘質土の順で、暗茶褐色粘質土の遺構面に達する。遺構面は全体に削平を受けているうえに、深い小溝が縦横に掘られているため、その存在が予想された西三坊大路の東側溝は検出できなかった。検出した遺構には、時期不明の柱穴S X 7831、古墳時代の布留式土器を含む土坑S K 7830・7832がある。

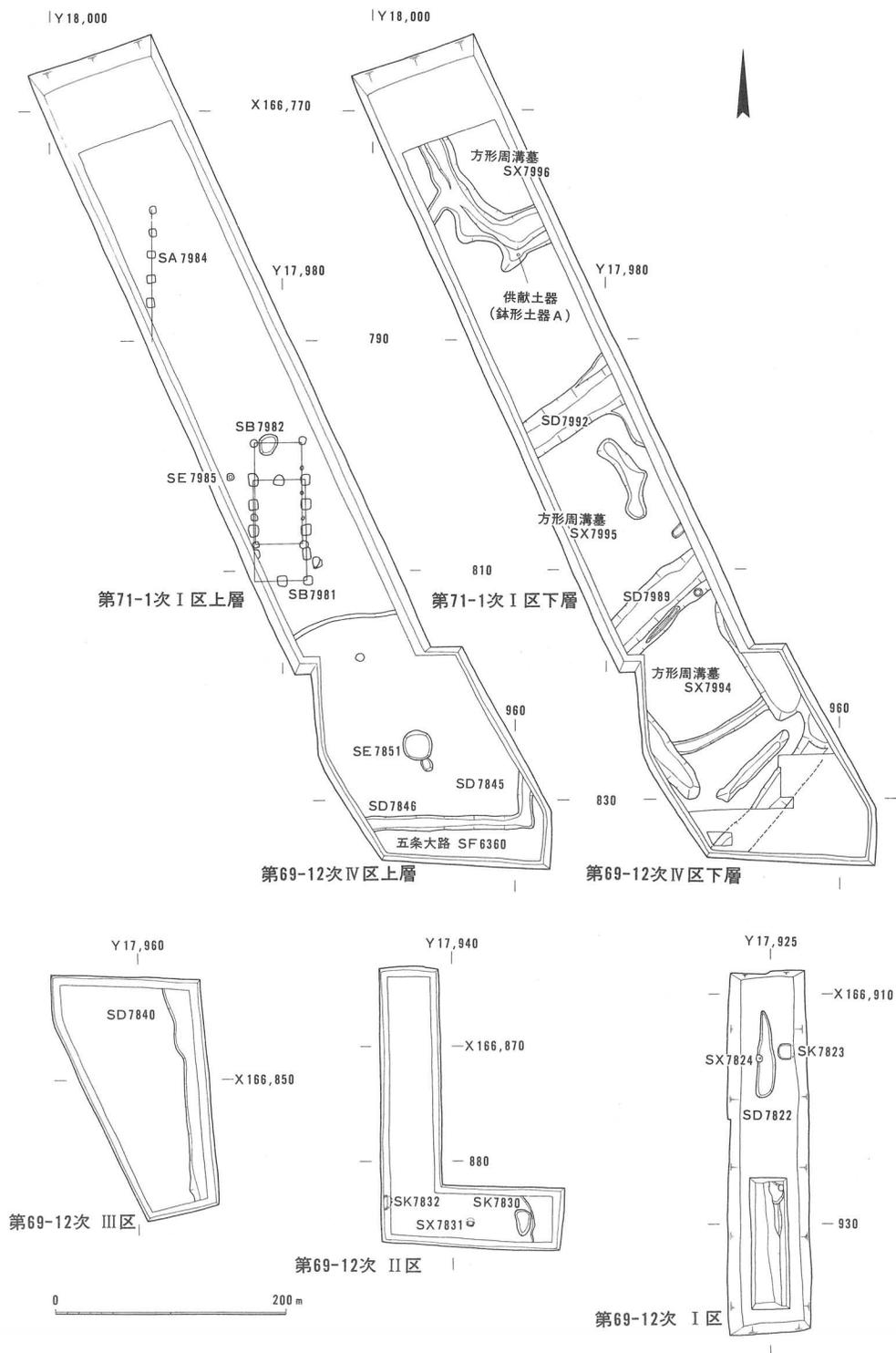


Fig.22 第69-12・第71-1次調査遺構図(1:600)

### Ⅲ 区

東西が南端で6m、北端で13m、南北21mの調査区である。基本的な層序は、上から耕土・床土・淡黄灰色砂質土・淡茶褐色砂質土・暗茶褐色砂質土の順で、茶褐色砂質土の遺構面に達する。ここも、調査区のすぐ東を流れる水路の前身とみられる自然流路S D 7840による削平が著しく、また深い小溝が多いため、存在が予想された西二坊大路の西側溝と、五条大路の南側溝は検出できなかった。小溝以外に顕著な遺構はない。

### Ⅳ 区

東西が南端で13m、中央部で17m、北端で14m、南北が19mの不整形な調査区を設けた。基本的な層序は、上から耕土・床土・淡灰褐色粘質土・淡黄褐色粘質土の順で、茶灰褐色粘質土の遺構面に達する。

**上層遺構** 本調査区では遺構面が硬い茶灰褐色の粘質土であり、他の調査区にくらべ、やや微高地を形成するものとみられる。調査区の南半で五条大路の北側溝S D 7846と西二坊大路の西側溝S D 7845、中央で井戸S E 7851を検出した。

五条大路の北側溝S D 7846は幅1.2m～1.4m、深さ0.3mの断面が逆台形を呈する溝で、全長15m分を検出した。西二坊大路の西側溝S D 7845は、幅1.3m、深さ0.2mの溝で、約5m分を検出した。なお、今回の調査区から東へ約100m離れた第58-1次調査の成果によると、五条大路S F 6360の幅員は側溝心々間で13.5mである。

井戸S E 7851は、右京五条三坊東南坪の東南隅近くに設けられたものであるが、井戸枠は完全に抜き取られ、掘形と抜き取り穴だけが残る。掘形は径2.5m、

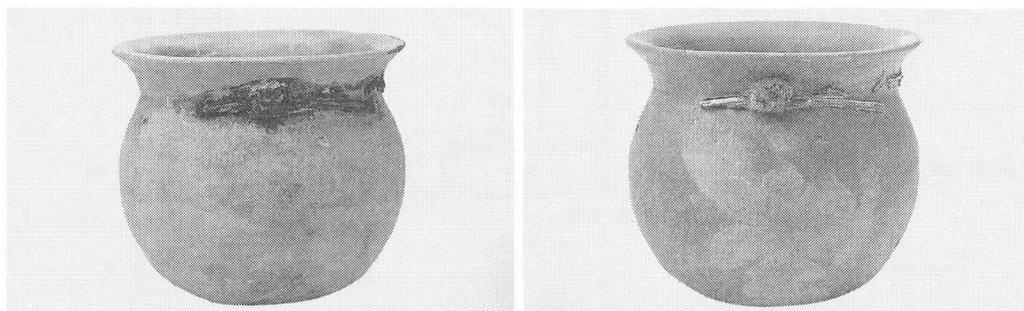


Fig.23 S E 7851出土の釣紐付き土師器壺 (右：保存処理後)

深さ2.6mであるが、上から1.3mの辺りからほぼ垂直に掘り下げている。底から藤原宮期の須恵器壺1点と土師器壺3点（Fig.23）、曲物の底板1点、獣骨片などが出土した。井戸枠の抜取り穴には拳大の玉石が混じる。

**下層遺構** 上層遺構の検出の際、下層に弥生時代の溝や土坑の存在が窺えたため、条坊道路の側溝を残しながら、調査区の北側のほぼ2/3にあたる面積を上層遺構面から約20cm掘り下げた。その結果、弥生時代の溝6条と、土坑・柱穴などを検出した。

斜行溝S D 7853は、幅約3m、深さ0.6m～0.9mの溝で、13m以上延びている。斜行溝S D 7854は、幅1.3m前後、深さ0.3m～0.6mの溝で全長8.4m。斜行溝S D 7855は、幅1m前後、深さ約0.6mで、9m分を検出したが、東西を斜行溝S D 7857・7858によって壊されている。斜行溝S D 7856は、S D 7853と重複する溝であるが、その前後関係は不明である。深さは約1mである。斜行溝S D 7857は、幅3m以上、深さ0.4m～0.7mで、7m以上延びている。斜行溝S D 7857は、幅2m以上、深さ0.6m～0.9mの溝で、8.5m以上延びている。

このうち、斜行溝S D 7855からは、弥生時代前期中段階の土器がまとまって出土し、斜行溝S D 7854からも同時期の土器が少量出土した。斜行溝S D 7853・7856・7857・7858からは中期前半の土器がごく少量出土した。その規模と配置から、S D 7853とS D 7857とS D 7858、S D 7856とS D 7857がそれぞれ組み合わせ方形周溝墓を形成するものと考えられる。

## まとめ

I・II・III区では、藤原宮期の顕著な遺構を確認することができなかった。しかし、遺構面が安定した状況で残されていたIV区では、ほぼ推定位置で西三坊大路の西側溝と五条大路の北側溝を検出するとともに、右京五条三坊東南坪の宅地の東南隅近くに井戸が設けられていたことを確認した。また、I・II区では弥生時代の四分遺跡の西辺を画す施設の一部とみられる南北大溝と、方形周溝墓群の存在を明らかにするという大きな成果を得た。藤原宮第5次調査では、弥生時代中期後半の方形周溝墓が1基検出されており（『報告』II）、四分遺跡の北から北西にかけて墓域が営まれていた可能性が高くなった。

## B 第71-1次調査

(1993年5月～7月)

この調査は、県道豊浦南八木線の道路建設に伴う第3次調査として、檀原市縄手町・四分町で行なったものである。調査地は藤原京右京五条三坊東南坪・東北坪に位置する。第69-12次調査Ⅳ区で五条大路北側溝・西二坊大路西側溝が検出されているので、今回の調査区のⅠ区を第69-12次調査Ⅳ区に北接し、東南坪の南北中心線を含む位置に、Ⅱ区を五条々間路の推定位置に設定した。

### Ⅰ 区

東西12m・南北約50mの調査区である。基本的な層序は第69-12次と基本的に同じである。

**藤原宮期の遺構** 掘立柱建物2棟、掘立柱塀1条がある。掘立柱建物S B 7981は桁行4間（柱間寸法2.2m）、梁間2間（柱間寸法2.4m）の南北棟である。柱掘形は一辺0.5～0.8m前後で、南北にやや長い長方形を呈す。深さは現状で、0.4m前後あった。なかに直径15cm前後の柱痕跡をとどめるものがあつた。掘立柱建物S B 7982は、S B 7981の位置に大部分重複して建て替えられた南北棟で、桁行4間（柱間寸法2.25m）、梁間2間（柱間寸法2.1m）である。柱掘形は0.6m前後の方形を呈し、深さは0.15～0.2mであるが、東側柱の多くは柱のあたり部分しか痕跡をとどめていない。掘立柱南北塀S A 7984は調査区北半部にあり、5間以上で、柱間寸法は2.1m、柱掘形は一辺約0.6m前後の方形を呈する。なお、井戸S E 7985は直径0.4mの曲物を井戸枠とする。掘形は直径0.6m、深さは現状で0.8mあつた。底には一辺5cmほどの礫をぎっしり敷き詰めていた。この井戸からは土器が出土していないので時期は確定しない。

**弥生時代の遺構** 中期前半の方形周溝墓が3基、後期初頭の斜行溝が1条ある。3基の方形周溝墓は基本的に同じ方向に並び、方眼北に対して大きく西に振れる。主体部は後世の削平のため失われていた。木棺の高さに掘形の深さを加えて、少なくとも0.6mは削平されたであろう。第69-12次調査Ⅳ区で3方の溝がみつかつていた方形周溝墓S X 7994は、溝S D 7989を検出して南北方向の規模が確定した。すなわち、溝心々距離でみると東西12m、南北20mある。溝の堆

積土は成形段階のものと微砂の大きく2層からなる。幅は3～4m、深さは現状で1mあった。方形周溝墓S X 7995はS X 7994と溝S D 7989を共有する。3方の溝は検出できたが西側の溝は調査区外にある。なおS D 7992は、方形周溝墓の溝が後期初頭に幅2.8m、深さ1.65mに掘り直された。後期の溝の堆積土は灰色粗砂であり、かなり速い流れであったとみられる。S X 7995の南北の溝心々距離は18mであった。方形周溝墓S X 7996はS X 7994・7995と離れた位置にある。溝幅3～4m、深さ約0.5mで、溝南西隅部で供献土器が1個体みつかった。すなわち、0.7～0.9mの卵形の掘形に、口縁部を上にして据えた鉢形土器Aである。外面に煤・二次的加熱痕が、内面には環状こげつき痕がみられた(Fig.24)。土器の中に遺物はなかった。

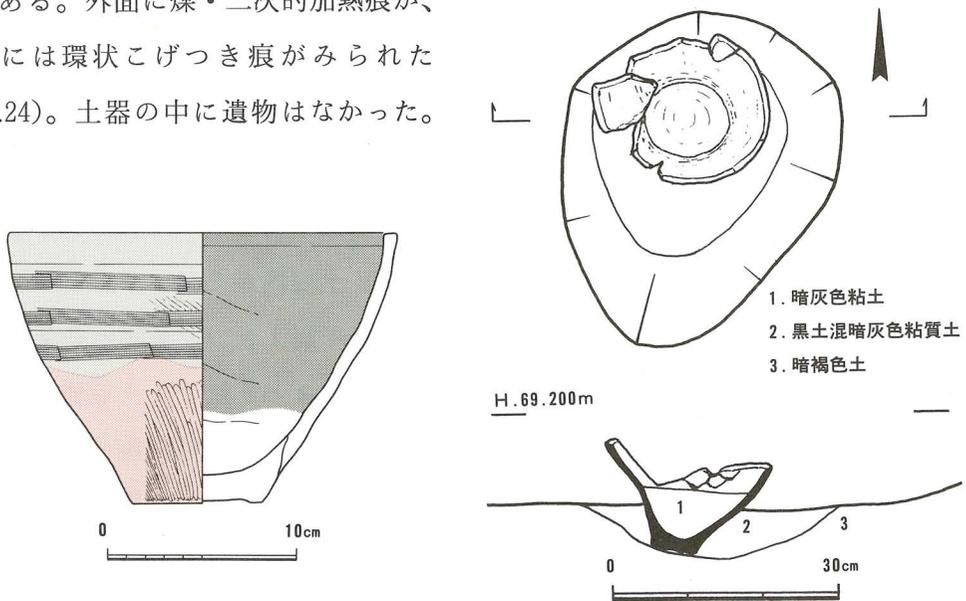


Fig.24 鉢形土器A (左)と出土状況 (右)

## II 区

基本的な層序は、上から順に暗褐色細砂(耕作土)、淡褐色細砂(床土)、褐色細砂、細砂質砂、褐色砂、暗褐色粗砂質砂、橙色中砂、青灰色細砂、青灰色細砂であった。

藤原宮期の遺構の検出面は、暗褐色砂上面である。調査区北端で藤原宮期の土師器や須恵器を包含した土坑S K 8009を検出した。東西10m以上、南北2m以上、深さ0.5mである。なお、五条々間路は検出できなかった。また、この

下層は一面に湧水の激しい河川の堆積砂で、I区にあった明黄色粘質土（地山）は、現地表下1.6mにおいても検出できなかった。

## まとめ

今回の調査によって、藤原宮期に属する建物を検出した。藤原宮の西に接し飛鳥川ではさまれた地域における当時の土地利用の実態を究明するに際して、重要な資料となろう。また、弥生時代の方形周溝墓を検出した。主体部は既に削平されていた。今回みつかった方形周溝墓は中期前半に属するのに対して、本調査区の北東約250mで行なった第5次調査でみつかった方形周溝墓は中期後半に属する。四分遺跡の弥生集落の北から北西にかけては、長期にわたって造り続けられた方形周溝墓からなる墓域が展開している可能性が強まった。

## 71-1 次調査検出の弥生時代方形周溝墓供献土器内・掘形内・外の微遺体分析

分析は花粉分析の処理法を用い、水酸化カリウム処理、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理を施して標本を作製し、生物顕微鏡を用いて行った。分析の結果、各試料とも微遺体は極めて少なかった。土器内からはコナラ属コナラ亜属2、アカザ科-ヒユ科1、キク亜科1、ヨモギ属1、シダ植物単条溝胞子10、同三条溝胞子11、小型鞭虫類卵3。掘形内からはコナラ属コナラ亜属2、イネ科1、アカザ科-ヒユ科1、シダ植物単条溝胞子5、同三条溝胞子2、小型鞭虫類卵4。掘形外ではクマシデ属-アサダ1、イネ科1、イネ属型1、シダ植物単条溝胞子5、同三条溝胞子2、鞭虫類卵4である。花粉数は少ないが、コナラ属コナラ亜属などの広葉樹が相対的に多かったようだ。草本のアカザ科-ヒユ科やヨモギ属などのキク科そしてシダ植物は、日当たりのよい乾燥した裸地を好む。試料の堆積時にはやや開けた乾燥した裸地であった可能性が高い。花粉遺体が少ないのは、堆積速度が速かったか、土壌生成作用によって分解したなどが考えられる。数量は少ないが、鞭虫類の寄生虫卵が土器内外に同程度含まれていることは注目される。一般的な汚染範囲内の数量であり、寄生虫卵により汚染された土壌によって埋没したことも考えられる。含まれていた花粉粒数を考慮すると比較的高頻度に含まれており、上位からの汚染の可能性もあるが、現状では起因が判断できない。（金原正明・金原正子）

## 6 本薬師寺の調査

### A 1992-1・1993-1次調査

(1993年2～4月)

本薬師寺の主要伽藍が想定される藤原京右京八条三坊では、Fig.25に示すとおり現在までに計5回の発掘調査が行われている。このうち第1次から第4次までの各調査は、いずれも道路や住宅の建設に伴う事前調査であった。寺域西南隅部における第1次調査では条坊の施工と寺造営工事との前後関係に関わる

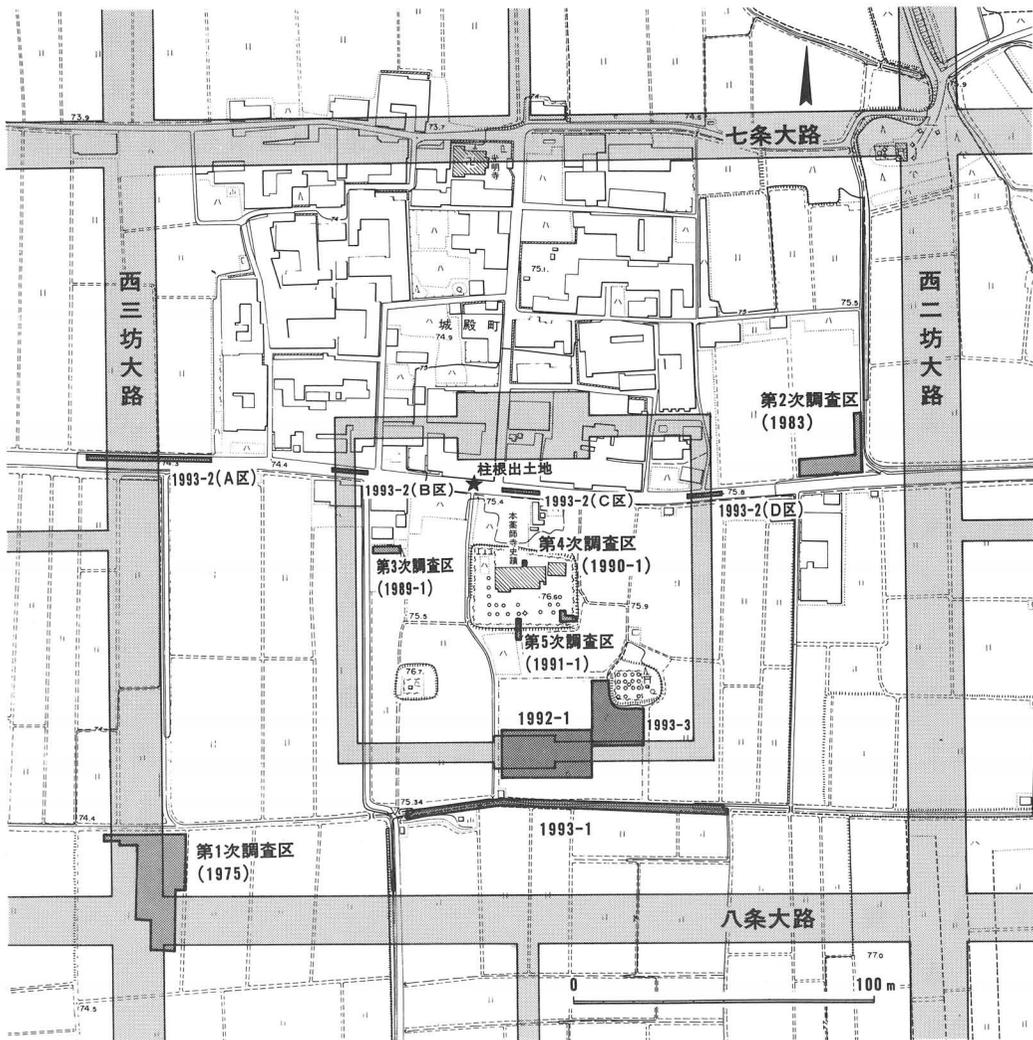


Fig.25 本薬師寺1992-1・1993-1・2次調査位置図(1:2500)

知見の一端を得たほか、第4次調査では金堂北面雨落溝を検出し、主要伽藍域における遺構の残存状況が比較的良好であることを確認した。これに対して昨年度実施した第5次調査は、寺域や伽藍規模の解明を目的とする学術調査を今後計画的に実施して行くうえでの予備的調査であった。小規模な調査区ではあったが、金堂の壇上積基壇外装と南面中央の階段の痕跡などを検出し、多くの成果を得ることができた。今年度は学術調査の2回目として、伽藍中軸線を明らかにするべく中門跡の調査に着手した。調査は1993年2月25日に開始し、同年4月16日に終了した。調査面積は450㎡である。

なお上記の学術調査に連続して、特別史跡指定地南辺を東西に走る農業用水路の改修工事に伴う調査を1993年4月19日から4月21日までの期間に実施した(Fig.25)。この調査でも、中門参道や先行条坊に関連する遺構を検出したため、以下に併せて報告する。

## 1 基本層序

遺跡は現飛鳥川左岸の沖積地に立地する。周辺域の垂直撮影空中写真からは、中門跡付近を東南から西北に延びる飛鳥川の旧河道と思しき数条の帯状湿潤地帯を判読することができる。現地表面は厚さ約15～20cmの水田耕作土で覆われ、その下に灰褐色土(厚さ約15cm)、暗黄灰褐色土(厚さ約20cm)などの遺物包含層が水田基盤土として順次堆積する。本薬師寺中門の遺構は、これらの各層のさらに下層に位置する暗褐色砂質土の上面において、東西方向に走る多くの耕作溝とともに検出した。検出面の標高は約75.0mで、現地表面下約50cmにあたる。この暗褐色砂質土層は厚さ5～10cmで、本薬師寺造営に伴って造成された整地土である。この整地土の直下では、藤原京の条坊遺構である西三坊々間路S F 2740をはじめとして、本薬師寺の造営に先行するいくつかの遺構を検出した。

## 2 遺 構

### ① 本薬師寺の遺構

#### 中門S B 130

中門と中門基壇に関連する遺構には、調査区西半部で検出した10の礎石据え

付け痕跡と礎石抜き取り痕跡、および基壇外周をめぐる石組溝、石敷遺構などがある。基壇の築成土等は削平されて全く遺存せず、上記の遺構はすべて先述の整地土（暗褐色砂質土）の上面で検出した（Fig.26・P L.11）。

**基壇外周の石敷遺構** 中門の南北両面に二重にめぐる玉石敷 S X 131・132・133・134と、これらの玉石敷にはさまれて矩形に折れ曲がる石組溝 S D 135・136などを検出した。石組溝 S D 135・136は中門の雨落溝であり、その内側の玉石敷 S X 131・133は中門基壇の外周をめぐる犬走りに相当する。また外側の玉石敷 S X 132・134は、中門周辺の化粧石敷と中門の南北に延びる参道の舗装石敷である。

S X 131は、中門南面に直径20～25cmの玉石を帯状に敷き詰めた石敷遺構である。とりわけ北縁が一直線に面を揃えることから、S X 131は中門の基壇外装を行った後に外装石材の南に接して敷かれた可能性が高く、中門基壇外周をめぐる犬走りと考えた。ただし後述するように、基壇外装の痕跡は S X 131の北に接する東西方向の耕作溝によって完全に失われている。この耕作溝埋土には粉末状の凝灰岩片を含むため、一時期、凝灰岩製の基壇外装が行われていた可能性もある。S X 131は中門南辺部分でよく残っているが、東南隅部から南面東回廊 S C 140との取り付け部に至る東面部分の遺存が良好でない。おそらく S C 140の基壇南端をなす玉石列 S X 148の西端が、S X 131の東南入隅部にあたるものと考えて大過なからう。

S X 131の南には中門の南面雨落溝 S D 135がめぐる。S D 135は底面に直径20～25cmの玉石を敷き、側石1石で護岸した深さ約25cmの石組溝である。南の側石は残りがよいが、北の側石を含めた S D 135の北半部から S X 131の南端部にかけては、中世以降の耕作溝 S D 156によって失われている。したがって、S X 131と S D 135の正確な幅は、ともに明らかでない。遺存した底石は約0.5%の西下がりの勾配を持つ。

S X 133は北面犬走りの玉石敷である。南端部分は水田耕作溝に削平されて失われており、東北隅から S C 140と取り付く入隅部にかけての部分も玉石の抜き取り痕跡が部分的に遺存するのみで、S X 133の正確な幅については不明である。

S X 133に接する耕作溝の埋土からも、南面と同様に粉末状の凝灰岩片が少量出土し、中門基壇外装に凝灰岩を用いた時期があったことを暗に示している。

S X 133の北をめぐる北面雨落溝 S D 136の遺存状況はきわめて良好である。北側石列のうち中門のほぼ中央間にあたる延長約4.2m分と、調査区西端部の両側石列（延長約1.2m）、および東北隅部の内側石列（延長約3 m）が後代の攪乱坑 S X 137によって抜き取られている以外はほぼ完全に遺存する。北面する部分の雨落溝の規模は幅が約60cm、深さが約25cmで、底面には直径約20～25cmの玉石を2～3石敷き詰め、底石とほぼ同規格の側石を1石立て並べて護岸する。S C 140と取り付く東面部分の雨落溝の幅は、北面から東面へと折れ曲がる入隅に1石だけ遺存した内側石によって、北面と同幅の60cmに復元することが可能である。東面部分はS C 140の北面雨落溝 S D 160との取り付き部から北に向かって約2.8%の勾配で下がり、北面部分は西に向かって約0.8%の下り勾配で調査区外に達する

S D 135と S D 136の底石上面には小礫が薄く堆積し、後に雨落溝底に礫を敷き足して化粧しなおした時期のあることがうかがえる。

上記の犬走りや雨落溝のさらに外周を取り巻くのが、S X 132、S X 134などの石敷遺構である。S X 132は南面雨落溝 S D 135の南に広がる玉石敷で、中門から南大門に連絡する参道の一部をなす。S X 132の東端は、南面東回廊 S C 140の西から2列目の柱筋にほぼ面を揃える。また、調査区南端に設けた拡張区では石敷がさらに南に延びる様相を呈する。特別史跡指定地南端の農業用水路改修に伴う調査では、削平が著しく全面にわたって石敷を検出することはできなかったが、S X 132東端の南への延長線上に石列を検出することができた。したがって、S X 132は中門とその両わきの南面回廊1間分づつを含めた約26.5m（90尺）の幅で南大門まで延びていた可能性がある。

S X 134は、中門の北面雨落溝 S D 136を北からコの字形に取り囲む、幅1.2m（4尺）の玉石敷である。また、S X 134のうち中門中央間にあたる部分の中世以降の攪乱土坑 S K 137によって大半が失われているが、S K 137の東南端付近に、S X 134の北縁をなす玉石列と直交して北へ延びる玉石 S X 150が、2石だ

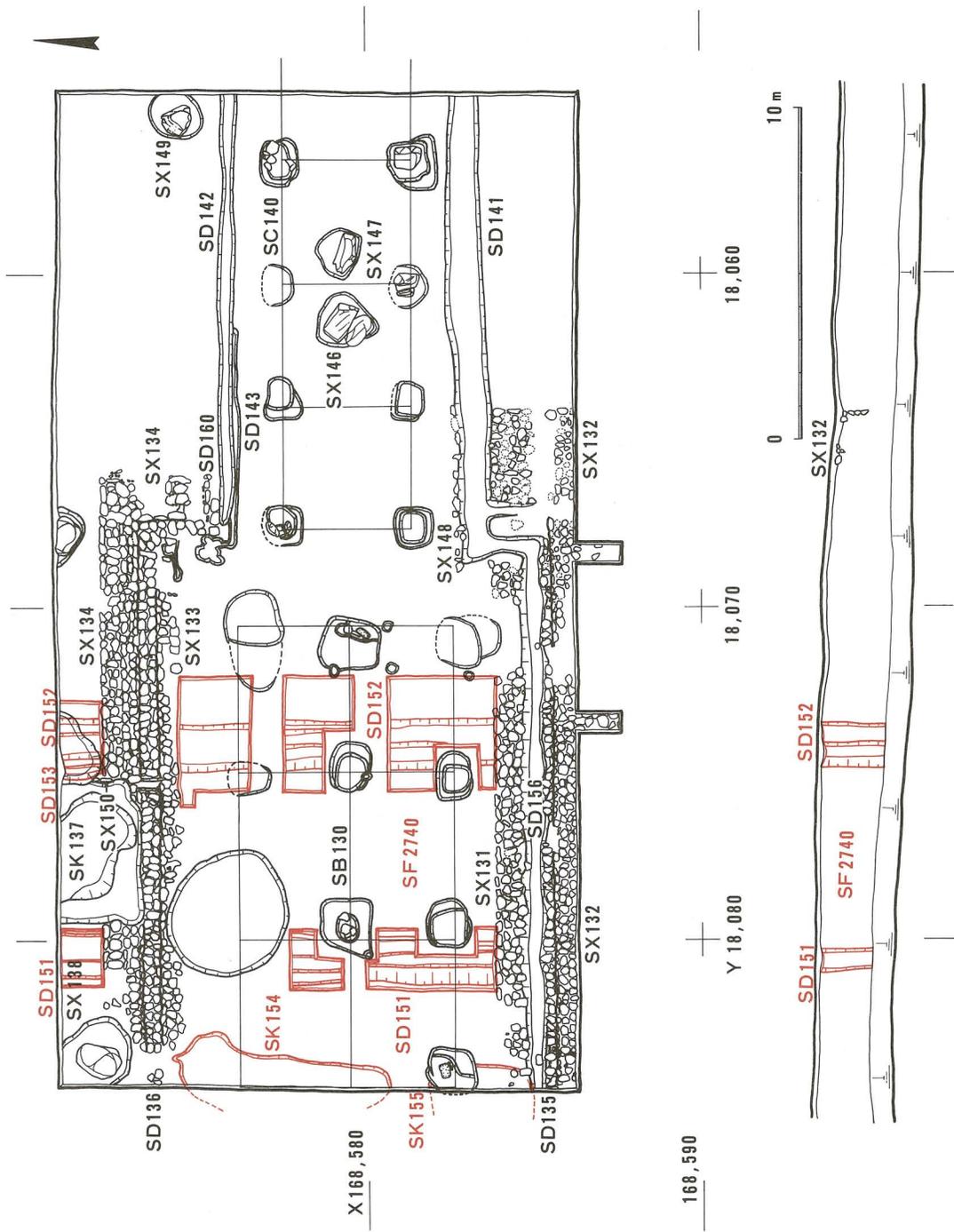


Fig.26 本薬師寺1992-1・1993-1次調査遺構図(1:200)

け抜き取られずに遺存している。この玉石によって、S X 134の北には中門と中軸線を合わせて幅約4.43m（15尺）の参道が、金堂に連続していたことが推定できた。S X 134の石の敷き方には顕著な特徴があり、外縁をなす玉石列以外に中央部に平行するもう1条の玉石列が認められる。これはS X 134の造営方法に関して2つの異なった解釈の可能性を示すものである。ひとつは、石敷の特徴を単なる工程によって生じたものと見る解釈である。つまりS X 134の外側を玉石列で縁取り、中央にいま一列の玉石列を設けた後に両者の間隙を玉石敷で順次埋めていくという石敷の工程を想定するわけである。第二の解釈は石敷の特徴が積極的に造成時期の差を示すものと理解する方向である。この場合には、中央の玉石列が当初の石敷の外縁を示し、外周の石敷は後の改修によって付加されたものとなる。しかしながら今次調査の結果からはいずれとも決し難い。この問題の解決は、今後の調査で中門と金堂とを連絡する参道の石敷に拡幅などの改修痕跡が検出されるか否かにかかっているといえるだろう。

S X 134の玉石間隙には随所に小礫を詰め込んで補修した痕跡が認められ、雨落溝の底石上面に礫を敷き足して化粧しなおすのと同時期の仕事と考えられる。このような玉石敷は南大門から中門を経て金堂へと至る参道と中門外周部にのみ存在し、回廊基壇の周囲にはない。したがって、伽藍中軸線を強調して中門のみ南北両面を石敷によって荘厳する意匠が採られたものと考えてよい。

**中門と基壇** 先述のようにS X 131、133の南端が耕作溝によって破壊されているため、犬走りの正確な幅は不明である。ただ、南面雨落溝S D 135の幅を北面雨落溝S D 136と同様に60cm（2尺）と仮定すれば、南面犬走りS X 131の幅は1.2m（4尺）に復元できる。北面犬走りS X 133の幅も同じく1.2m（4尺）であったと仮定すれば、S X 131の北端からS X 133の南端までの距離、すなわち約8.9m（30尺）が**中門基壇の復元南北長**ということになる。S X 131、133の東面部分の幅は、中門北面雨落溝の東北隅部から南に折れ曲がる東側石列の南北引き通し線と、S C 140基壇南端を画する玉石列S X 148の西端部との東西距離から雨落溝の幅（60cm）を差し引けば、約1.2m（4尺）に復元できる。したがって、**中門基壇の復元東西長**は、中軸線で折り返して約16.3m（55尺）となる。

中門の基壇土は、冒頭で述べたように完全に削平されて遺存しない。また、地下水位が高く地盤がそれほど堅牢でないにもかかわらず、基壇造成に際して掘込地業等の地盤安定工事を行った形跡もない。西北隅部の3箇所を除く計9箇所の礎石据え付け痕跡と抜き取り痕跡は、いずれも寺域造成に伴う整地土（暗褐色砂質土）の上面で検出した。とりわけ棟通り中央間の東西両側の礎石据え付け・抜き取り痕跡が明瞭で、遺存状況も良好である。これらの痕跡から復元される**中門の平面規模**は、桁行3間〔総長13.9m（47尺）、柱間寸法は中央間が5m（17尺）、両脇間が4.43m（15尺）〕、梁間2間〔総長6.5m（22尺）、柱間寸法3.25m（11尺）等間〕である。この場合、側柱心から雨落溝心までの距離は平側、妻側ともに約9尺と等しくなる。また、前述の基壇の復元寸法をもとに試算した側柱心からの基壇の出も、平側、妻側ともに等しくて1.2m（4尺）となる。

**中門の基壇外装**は耕作溝によって完全に失われており、意匠、構造等の詳細は不明である。ただし、先述のように基壇想定位置に隣接する耕作溝の埋土から粉末状の凝灰岩片が出土しており、ある時期に凝灰岩切石を用いた基壇外装が行われていた可能性がある。また、雨落溝が基壇外周を途切れることなく直線的にめぐらるため、少なくとも基壇の外側に張り出す形式の階段は考え難い。基壇を内側に欠き込んで階段を設けていたとしても、平側基壇の出の復元寸法は約1.2m（4尺）ときわめて短いから、石階の段数は最大でも葛石を含めて3段を越えることはあり得ない。

**中門の基壇高**の復元にある程度の根拠となるのが、調査区西北隅部の攪乱土坑に投棄されていた中門所用と推定される大きな礎石S X 138である。この礎石は直径約1～1.2mの花崗岩製で、ほぼ反転して本来の上面をなす平坦部が下になった状態で検出した。柱の当たる上面は叩いて平坦に造るが、柱座や地覆座などの造り出しはない。平坦部の大きさは100cm×120cmの不整円形で、石の厚みは最大約75cmを測る。いま仮に、この礎石が最も遺存の良好な棟通り中央間西側の礎石抜き取り痕跡に存在したものと仮定すれば、基壇高はおよそ60cm弱に復元することが可能である。この基壇高は、先に述べた平側基壇の出から導き出される石階の段数とも矛盾しない。

## 南面東回廊 S C 140

中門東方に連続する南面東回廊 S C 140を3間分検出した。単廊で、柱間寸法は桁行3.7m(12.5尺)等間、梁間3.7m(12.5尺)である。検出した計8箇所の柱位置のうち、南側柱通の2箇所には礎石が当初の位置に座ったままの状態で見つかる。これらの礎石はいずれも上面の平坦な花崗岩で、金堂、東塔の礎石のように柱座や地覆座などの造り出しはない。残る6箇所の柱位置のうち、3箇所では礎石据え付け痕跡と礎石抜き取り痕跡をともに検出し、それ以外の3箇所では礎石抜き取り痕跡のみを検出した。また、北側柱通西端の礎石据え付け痕跡には中央の凹みを取りまくように4個の根石が見出される。これ以外にも、回廊基壇中央部や調査区東端で見出した後代の土坑からは、回廊の礎石に用いられていたものと考えられる直径約1mの大きな花崗岩4石が見出された(S X 146・147・149)。これらにも造り出しなどの人為的な加工痕跡は見出されない。

回廊基壇は、S X 148が示すように玉石1石を立て並べて基壇外装としていたものと考えられる。その外周に犬走りの石敷はなく、基壇外装の玉石列が直接雨落溝の内側石列をかねる形式である。雨落溝の石材は大半が中世以降の耕作溝 S D 141・142によって抜き取られているが、回廊が中門に取り付く北面入隅部に底石と外側石列がわずかに見出し、入隅部から東に向かって基壇外装石の抜き取り痕跡である S D 143が約6.5mにわたって連続する。これによって、S C 140の北面雨落溝の幅は中門雨落溝と同幅の60cm(2尺)であったことが判明した。また S D 143と S X 148との南北距離から、回廊の基壇幅を7.1m(24尺)、側柱心からの基壇の出を5.75尺に復元することができる。S D 143の埋土にも微量の粉末状凝灰岩片を含むから、中門基壇とともに回廊基壇にも凝灰岩が用いられた時期が想定できる。また、南面の基壇外装石のうち S X 148より東方の部分は S D 141によって失われているが、S D 141の埋土からは回廊のものと思われる壁土の一部が見出された。壁土には寸莎(すさ)のような藁状の植物繊維と、表層仕上げと見られる白土が混じる。

### ② 本薬師寺造営に先行する遺構

本薬師寺の造営に先行する遺構には、西三坊々間路 S F 2740とその東西両側

溝 S D 151・152、土坑 S K 154・155などがある。いずれの遺構も、中門造営時の整地土である暗褐色砂質土の直下で検出した。

S K 154は調査区西辺で検出した南北約 6 m、東西約 1 m、深さ約 20cm の不整形な土坑である。埋土には飛鳥Ⅳを中心とする 7 世紀後半の土器片と炭化物とを多量に含む。

S K 155は調査区西南隅部で検出した大形の土坑である。西半部は調査区外にあって全容は不明だが、直径約 3 m の隅丸方形の平面形が想定される。調査区西壁の断面土層観察では、掘形の壁面はほぼ垂直で、深さも確認した範囲で 80cm 以上ある。掘形中央部の直径約 1 m の範囲に暗灰色粘質土が堆積するのに対し、その外側の埋土が黄褐色砂質土で、あるいは井戸である可能性もある。なお、出土遺物は皆無である。S K 154・155などの土坑は、寺域の設定より以前に右京八条三坊西南坪に存在した宅地に関連するものとも考えられる。

西三坊々間路 S F 2740は両側溝心々間距離が約 6 m (20尺) で、中門とほぼ中軸線が一致する (P L.12)。両側溝 S D 151・152はともに素掘りで、堆積土は上層と下層に区分できる。上層堆積土は断面形が幅約 1.5m、深さ約 35cm のすり鉢状を呈し、下層堆積土は上層堆積土の下に底面の幅約 30~70cm の逆台形状を呈して堆積している。おそらく当初は逆台形状の下層溝が掘削されたが、大略埋まった後に再びすり鉢状の上層溝が掘削されたのであろう。出土遺物の大半は土器で、藤原宮直前期の土師器・須恵器が中心となっている。なお S D 151・152は指定地南辺の農業用水路改修に伴う調査でも検出し、堆積状況、出土遺物の年代も同様であることを確認した。

S D 153は S F 2740の東側溝 S D 152の西肩に重複して検出した幅約 70cm、深さ約 25cm の素掘溝である。調査区北端において S D 152から離れてやや西北方向に延びていく様相を呈するため、S D 152とは別の溝であることがわかる。堆積土からは、本薬師寺式の軒平瓦 (6647G 型式) が 1 点出土した。したがって、S D 153は寺域の設定に伴って S F 2740が廃絶された後に開削され、中門の造営工事が開始される直前まで存続していたことがうかがえる。おそらく本薬師寺の草創から中門の建設に至るまでには一定の時間的経過があったものと

みられ、この期間にはもとのS F 2740の側溝の位置を踏襲して暫定的な排水路S D 153が開削されたものと考えられる。

なお冒頭でもふれたように、1976年度に右京八条三坊西南隅部において実施した第1次調査では、藤原京の条坊施工と本薬師寺の寺域設定との前後関係に関する知見を得ている。それによると、西三坊大路S F 102東側溝は本薬師寺の瓦を含む南北溝S D 110を埋めて整地した後に開削されており、本薬師寺の寺域が西三坊大路の施工に先だって定められた可能性の高いことが指摘されている。その後、この調査結果は本薬師寺の造営開始時期を遡らせる有力な根拠として長らく重視されてきた。しかしながら、今回の調査で中門下層に西三坊々間路を検出したことから、少なくとも本薬師寺の中心伽藍域では堂塔の造営以前に藤原京の条坊が設定されていたことはほぼ確実である。第1次調査で確認したS D 110は、寺域西辺においてどのような機能を持つ溝であるのか。そしてS D 110の上を覆う整地土が広範囲に及ぶものなのか、あるいは寺域西南隅付近のごく狭い範囲に限定されるものなのか。解決すべき問題は山積しているが、今後調査が進むにつれて自ずと明らかとなる。

### 3 遺物

**土器** 今回出土した土器は少量で、整理箱10箱程度である。中門・回廊の雨落溝から出土した土器は、奈良時代後半から平安時代に属する土師器と須恵器などが主体であり、藤原宮期の土器はごく少量であった。これに対して、本薬師寺造営に先行する遺構から出土した土器の量は多く、先行条坊S F 2740の両側溝出土のものと土坑S K 154出土のものに大別できる(Fig.27)。

S F 2740の両側溝S D 151・152からは相対的に遺物は多いが、藤原宮直前期の飛鳥Ⅳを最新とする土器を中心に、少量の飛鳥Ⅱ・Ⅲの土器、さらに弥生土器畿内第Ⅴ様式や庄内式土器などが出土した。

S K 154出土土器の大半は飛鳥Ⅳに属し、これに飛鳥Ⅲや弥生土器第Ⅴ様式が混じる。

特殊なものとして、ヘラ記号を施した土器、漆の付着した土器や朱の付着した土器、さらに円面硯・獣脚硯が出土した。

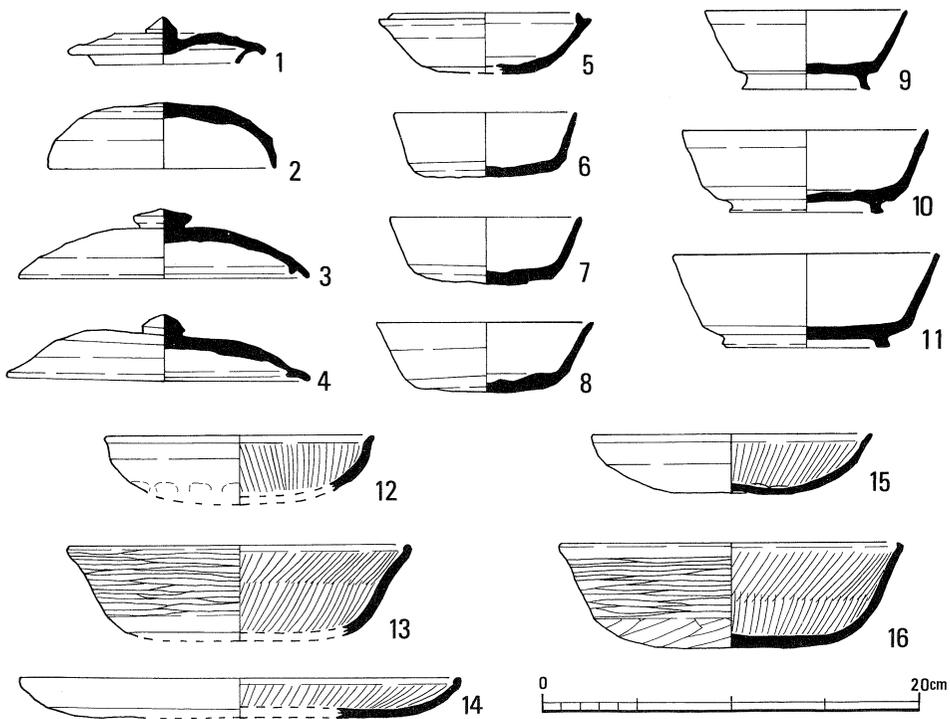
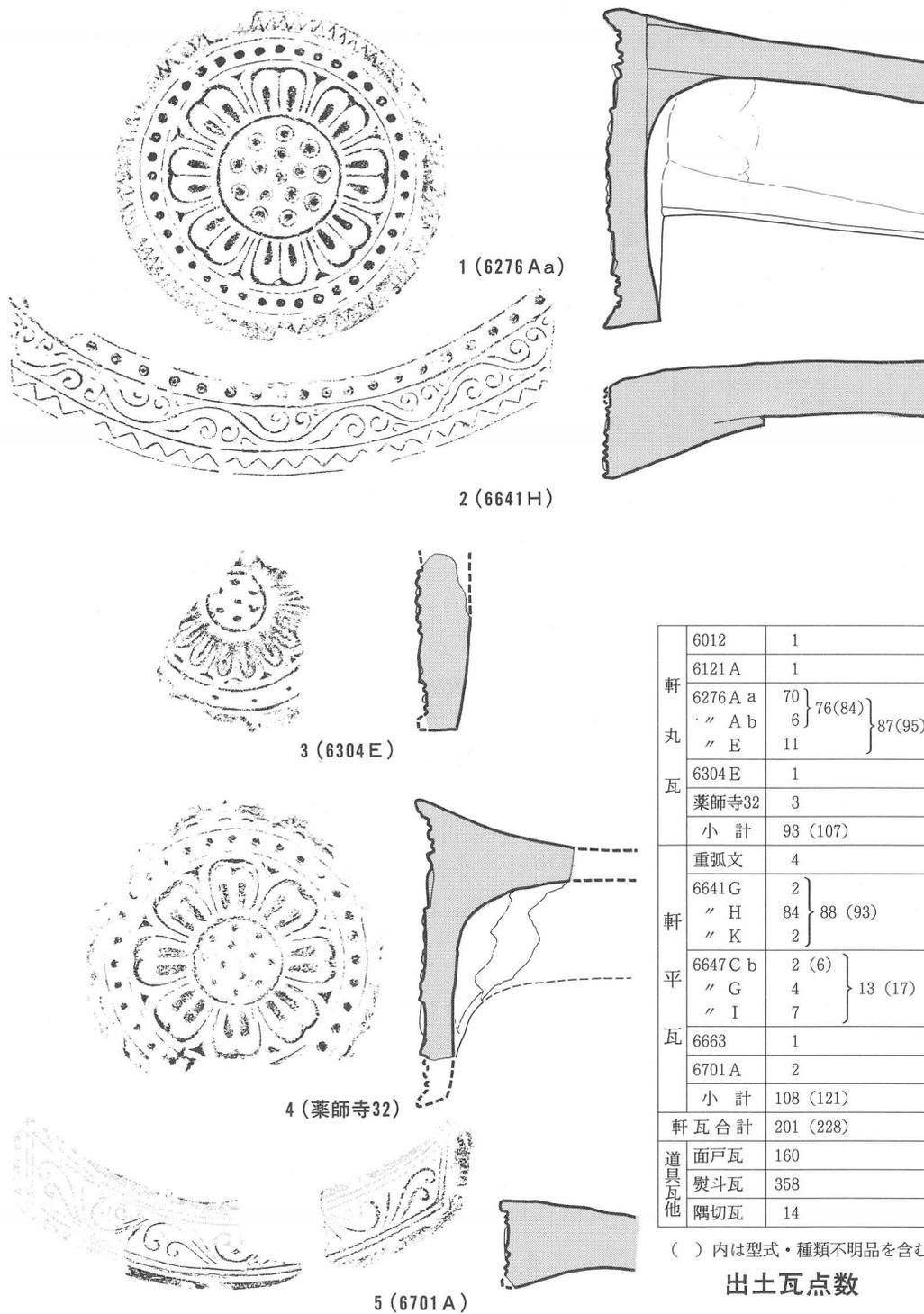


Fig.27 本薬師寺1992-1次調査出土土器(1:4)  
1~11・15・16:SK154, 12~14:SD152

瓦 瓦の出土量はきわめて多く、整理箱200箱以上におよぶ。瓦は中門と南面東回廊の南北両側に多く、とりわけ中門の北側では雨落溝の北に沿って帯状に堆積していた。出土した瓦の種類は、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、道具瓦(熨斗瓦・面戸瓦・隅切り瓦)などである。軒瓦と道具瓦の種別と出土点数は別表にまとめた(Fig.28)。

総計228点出土した軒瓦の大半は創建時のものであり、そのなかでも、軒丸瓦は6276Aa、軒平瓦は6641Hが8割以上ある。したがって、本薬師寺中門と南面東回廊の創建軒瓦は6276Aa-6641Hの組み合わせとみてよい(PL.13)。このほか裳階用の6276E-6647Iが少量あるが、量的に少ないので金堂の所用瓦であろう。奈良時代から平安時代初めの軒瓦も少量出土した(Fig.28-3~5)。多くは平城薬師寺と同範である。

今回の調査で、中門と南面回廊の創建軒瓦が判明したことにより、前回の金堂の部分調査とあわせ本薬師寺の主要な創建軒瓦が軒丸瓦6276Aと軒平瓦6641



軒 丸	6012	1	
	6121 A	1	
	6276 A a	70	} 76(84) } 87(95)
	" A b	6	
" E	11		
瓦	6304 E	1	
	葎師寺32	3	
	小計	93 (107)	
軒 平	重弧文	4	
	6641 G	2	} 88 (93)
	" H	84	
	" K	2	
	瓦	6647 C b	2 (6)
" G		4	
" I		7	
6663		1	
瓦	6701 A	2	
	小計	108 (121)	
	軒瓦合計	201 (228)	
道具瓦 他	面戸瓦	160	
	熨斗瓦	358	
	隅切瓦	14	

( ) 内は型式・種類不明品を含む

### 出土瓦点数

Fig.28 本葎師寺1992-1・1993-1次調査出土瓦(1:4)

Hのセットであることがほぼ確実にされた。金堂出土瓦と中門・南面回廊出土瓦を比較すると、軒丸瓦・軒平瓦とも金堂のほうが範傷が少ない。

さて、平城京薬師寺の主要な軒瓦の組み合わせは、軒丸瓦6276Aと軒平瓦6641Gであることがわかっており、本薬師寺とは軒平瓦の型式が異なる。6641Hと6641Gを比較すると、Hのほうが紋様が整い、Gは枝葉の巻きが狂ったり線がか細い点で後出的である。HをモデルにしてGを作範した可能性が考えられる。一方、今回の調査で出土した軒丸瓦6276Aには範が強く磨滅したものが含まれる。『薬師寺発掘調査報告』では、「瓦当範が強く磨耗したものが本薬師寺の発掘で出土すれば、6276Aはすべて本薬師寺用として製作され、その後、平城薬師寺へ運ばれ、再利用されたことが明らかになる。」としたが、本薬師寺へ奈良時代に平城薬師寺から瓦が供給されていることが明らかになった現在、この磨滅した6276Aもこの流れに乗っている可能性があり、必ずしも本薬師寺から平城薬師寺への瓦の移動を示さないであろう。この範の強く磨滅した6276Aは範割れを起こした6641Gと胎土・焼成が近似する。

道具瓦では熨斗瓦が多量に出土した。すべて切り熨斗瓦である。通常の平瓦が凹面にナデ調整をおこない側縁に面取りを加えるのに対し、熨斗瓦は凹面を調整せず側縁を面取りしない。面戸瓦も切り面戸瓦である。大半が蟹面戸瓦と鯉面戸瓦だが、少量の上り面戸瓦がある。

**その他** 農業用水路改修に伴う1993-1次調査では、中門の西南隅方向に当たる現有水路の掘形埋土から、上面の一部が方形に整形された痕跡のある花崗岩製の礎石が出土した(Fig.29)。この礎石は一辺約55~60cm、高さ約36cmで、整形痕の上面には柱座と壁地覆座とが一体となった方形の造り出しの痕跡がある。ただし、造り出しの上面は削平されていて、元の高さは不明である。既述のごとく中門や回廊の礎石は造り出し等の加工痕跡を伴わない花崗岩であるから、この礎石

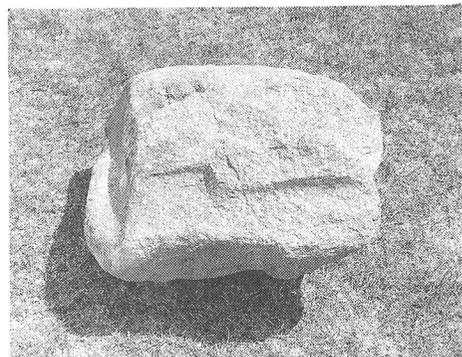


Fig.29 1993-1次調査出土の礎石

は少なくとも中門や回廊所用のものではあり得ない。やや小規模であることから裳階のものである可能性もあるが、堂塔名は不明である。

#### 4 まとめ

今回の調査の結果、本薬師寺中門の遺構はきわめて遺存状況が良好であることを確認した。そして、門基壇の外周を石敷の犬走りや石組雨落溝、そしてさらに化粧石敷などがめぐり、仏門としての偉容をいやがうえにも高める意匠であったことが明らかとなった。このような基壇外周意匠の格式の高さを考慮すれば、重層門であった可能性も十分に考えられる。ただし、今回の調査では、中門の梁間柱間寸法が11尺等間と比較的短いことが判明したほか、側柱と雨落溝との心々間距離も平側、妻側ともに9尺と短く、二重門と考えるにはやや難点があるといわざるを得ない。あるいは二層目にのみ入母屋の屋根が付く楼門であった可能性も否定できない。この問題はいまひとつの仏門である南大門の意匠・構造とも深く関わっており、今後の調査を待つてさらに詳細な検討が必要となろう。

最後に平城薬師寺との関係について付言しておく。薬師寺の伽藍配置に関しては、平城遷都に際して主要伽藍が移築されたのか否かという問題が長く議論の対象となってきた。今回の調査では残念ながらこの問題を解決する決定的な資料を得たとはいえない。しかし、あえていえば次のような点から、平城遷都に伴う中門の移築は可能性として低いといえる。

- ①本薬師寺中門と平城薬師寺中門は規模の上で大きく相違する(Fig.30・31)。特に平城薬師寺中門の平側軒の出が10尺以上に復原できるのに対し、本薬師寺中門では9尺しかない。軒の出の変更は部材等の細部にわたって不都合をきたす。
- ②奈良時代の瓦が出土しているため、平城遷都後にも平城薬師寺から瓦の供給があり、瓦の差し替え等の維持管理の行われていたことが推定できる。
- ③本薬師寺の単廊と平城薬師寺で完成した複廊とでは寸法が大きく異なるため、全面的な新築工事となった可能性が高い。

以上は中門に関する所見であり、金堂・塔などを含めた移築・非移築論の決着は今後の調査の進展に期待したい。

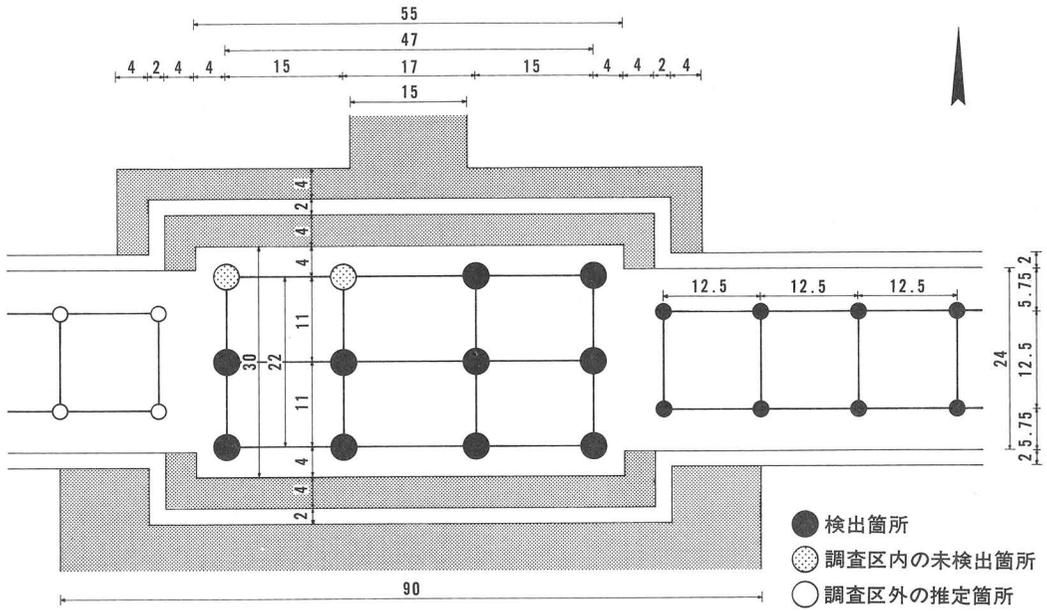


Fig.30 本薬師寺中門模式図 (単位：小尺)

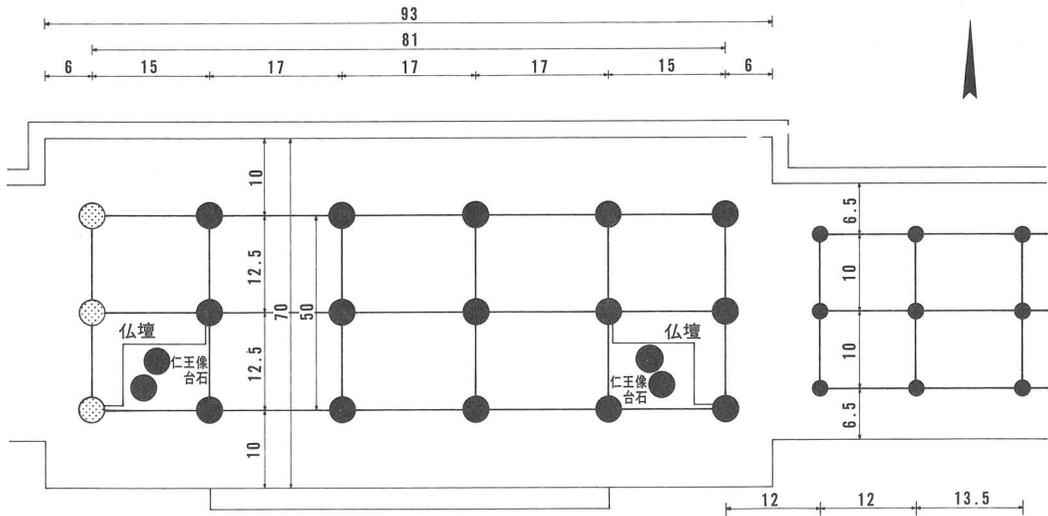


Fig.31 平城薬師寺中門模式図 (単位：小尺)

## B 1993-2 次調査

(1993年9月)

この調査は、ガス・水道管理設に伴う立会調査として、檀原市城殿町で実施したものである。調査は西三坊大路想定位置と、本薬師寺東西両面回廊想定位置、および伽藍中軸線上の4箇所で行った (Fig.25)。

西三坊大路想定位置 (A区) では、現在の路面から約1.2m掘削したところで遺構面に達し、素掘りの南北溝を2条検出した。このうち東の南北溝は幅2.2m、深さ0.2m以上あり、その埋土は暗青灰色砂質土である。西の南北溝は幅0.9m、深さ0.5mで、埋土は茶灰黒色砂質土である。また両溝の心々間距離は8.3mである。1975年度の右京八条三坊西南隅部の調査では、西三坊大路両側溝を検出し、心々間距離が15.2mであることが判明している。したがって、今回検出した2条の南北溝のうち、東の溝が西三坊大路東側溝の北の延長上に位置し、西の溝は西三坊大路のほぼ中央に位置することになる。

本薬師寺の東西両面回廊想定位置 (B・D区) では、東面回廊想定位置で現在の路面から深さ約1mで、西面回廊想定位置で深さ約0.7m掘削したところで遺構面に達したが、本薬師寺に関わる遺構は確認できなかった。

伽藍中軸線上 (C区) では、現在の路面から深さ約1.1m掘削したところで遺構面に達し、南北溝1条と近世の土坑1基を検出した。南北溝は当初1992-1次調査で確認している西三坊々間路西側溝ではないかと思われたが、実際それより西に約3mずれる。また西三坊々間路東側溝も検出できなかった。

以上の調査において、軒平瓦6647I 2点、面戸瓦1点、熨斗瓦3点と多量の丸瓦・平瓦が出土した。なおB・C区間の立会の際に、C区の西約10mの地点 (Fig.25の★印) から、底部に横材と組み合わせるための仕口をもつ、直径37cmの柱根が1本出土した (Fig.32)。柱根の構造と出土位置が講堂南西隅のすぐ南にあたることを考慮すれば、断定はできないが、幢竿支柱の可能性を指摘しておきたい。今後の調査に際しては、この種の遺構、遺物の存在を念頭におく必要がある。

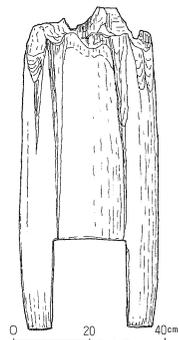


Fig.32 柱根 (1:20)